



日本中央競馬会
特別振興資金助成事業

全日畜ワークショップ（福島会場）

畜産経営の危機を克服し、持続発展のヒントを求めて

速報レポート

- ◎ 開催日 令和5年9月12日（火曜日）
- ◎ 時間 13：00（開会）から16：00（閉会）
- ◎ 会場 グランパークホテルエクセル福島恵比寿

令和5年11月

全 日 畜

（一般社団法人 全日本畜産経営者協会）

はじめに

私たち、畜種横断の畜産生産者の団体「全日畜」は、令和5年度から日本中央競馬会畜産振興事業の「畜産経営の危機克服・持続のための実態緊急調査事業」を2力年で実施しております。

この事業は、近年、畜産経営の継続が非常に困難な状況の中、直近ではパンデミック等による飼料をはじめとした生産資材の価格暴騰や入手困難、更にはSDGs対応など、畜産経営存続が危機的な状況であり、廃業に追い込まれる経営体も少なくないことから、今回の危機により受けた影響及び対応状況、政府施策の畜産経営者への貢献度等を調査するとともに、危機対応事例集等を作成・配布することで、畜産経営の継続に資することを目的とする事業です。

本書は、令和5年9月12日（火）に「畜産経営の危機を克服し、持続発展のヒントを求めて」をテーマとして実施した、全日畜ワークショップ（福島会場）の概要を整理した「速報レポート」です。今回は鳥インフルエンザ対応、和牛の肥育期間短縮によるコスト低減、地域との共存、専門家の徹底的な活用、金融機関との良好な関係などについて意見交換が行われました。これからの概要を掲載いたしましたので、今、危機に立ち向かっておられる方々、さらにこれからもやってくるであろう危機に準備されている方々の参考となれば幸いです。

令和5年11月

一般社団法人 全日本畜産経営者協会
(全日畜)

目 次

・ ワークショップ（福島会場） プログラム	1
・ 全日畜「危機克服」ワークショップ（福島会場）の概要	
・ 発表者の紹介	2
・ 全日畜 畜産経営の危機克服ワークショップ（福島会場）の概要	3
◎ 本事業の概要とワークショップ開催の趣旨説明	4
◎ ワークショップ第一部 事例紹介	5
◎ ワークショップ第二部 意見交換 要旨	19
・ 発表者資料	30
有限会社東北ファーム 山本高久氏 資料	30
株式会社伊東牧場 伊東輝美氏 資料	34
株式会社アグリテクノ 三品重利氏 資料	37
有限会社鈴木畜産 鈴木佳子氏 資料	43
成田牧場 成田昌弘氏 資料	47
・ 会場アンケート結果	51
・ 報道記事	55

畜産経営の危機を克服し、持続発展のヒントを求めて

- ◎ **開催日** 令和5年9月12日（火曜日）
- ◎ **時間** 13:00（開会）から16:00（閉会）
- ◎ **会場** グランパークホテルエクセル福島恵比寿
2階「さくら」
〒960-8051福島県福島市曾根田町10-6
TEL 024-533-4166
- ◎ **プログラム**

第一部 13:00 ～ 14:40

畜産経営者等のゲストから、現在畜産経営を実施・継続されている今回の畜産危機をはじめとした危機に当たって、どのように対応してこられたか、また、その対応における課題等についての報告発表

休憩 14:40 ～ 14:55

第二部 14:55 ～ 16:00

会場参加全員による、今回の畜産危機を乗り切るための対応策などについて意見交換を行い、畜産経営の危機を克服し、さらに持続発展するための取組についてのヒントを追求する

一般社団法人 全日本畜産経営者協会
(全 日 畜)

1 全日畜「危機克服」ワークショップ（福島会場）の概要

- ◎ 開催日 令和5年9月12日（火曜日） 13:00 ～ 16:00
- ◎ テーマ 畜産経営の危機を克服し、持続発展のヒントを求めて
- ◎ 会場 グランパークホテルエクセル福島恵比寿 2階「さくら」

2 近年の畜産経営危機の乗り切り事例及び、今後の対応方向について、意見交換を行います

	<p>青森県の畜産経営者</p> <p>有限会社 東北ファーム 専務取締役 山本 高久 様</p> <p>（養鶏経営者から）</p>	<p>青森県三沢市</p> <p>昭和41年に1万羽で養鶏を創業、現在の飼養規模150万羽 飼料価格の高騰、建築資材等生産資材の高騰、コロナ禍の影響を受け、さらに、2022年12月高病原性鳥インフルエンザの感染で、139万羽の採卵鶏の殺処分に至った。 そのため、全国に先駆けて分割管理の導入を決め、約40haの養鶏場を分割する工事が順次進行中。</p>
	<p>宮城県の畜産経営者</p> <p>株式会社 伊東牧場 代表取締役 伊東 輝美 様</p> <p>（肉用牛経営者から）</p>	<p>宮城県登米市</p> <p>肉用牛の哺育から肥育までの一貫経営 ①食卓に安全、安心で美味しい牛肉を届ける、②畜産を核として、環境と調和した、循環型農業を目指す、③従業員の育成と向上を図り、豊かで充実した生活を守る、④現状に満足することなく、日々研鑽を積むが経営理念。 HACCPの手法に基づいた衛生管理システム導入 登米市、地域の農家、伊東牧場の3者が連携・補完し合いながら耕畜連携を行い地域の成長に貢献している。</p>
	<p>福島県の畜産経営者</p> <p>株式会社 アグリテクノ 代表取締役社長 三品 重利 様</p> <p>（養鶏経営者から）</p>	<p>福島県伊達市</p> <p>採卵鶏経営＋農畜産物加工による多角化経営 1961年に三品種鶏場として創業し、現在は「畜産業の川上から川下まで」をテーマに、鶏卵生産、食品加工、鶏糞肥料生産を行っている。 ヒナから成鶏までの一貫生産による衛生管理プログラム、鶏舎内快適な環境づくり、それによる高品質な卵生産、また、防疫のため育雛・育成・成鶏場を分散するなどのリスク管理を実施。 EU基準を満たした鶏舎などアニマルウェルフェアにも対応。</p>
	<p>福島県の畜産経営者</p> <p>有限会社 鈴木畜産 鈴木 佳子 様</p> <p>（肉用牛経営者から）</p>	<p>福島県石川郡石川町</p> <p>肉用牛肥育及び牛肉商品の販売 先代が、自然の食材で疲労回復やストレス軽減に効果があると『石川はちみつ牛』を開始、主軸となる加工品は、「塩だけで食べられるハンバーグ」と「ソースのいらないローストビーフ」 震災で一時中断したが、「持続化補助金」「福島県6次化ステップアップ補助金」等を活用して加工品の販売を再開し、従来のイメージを一新する取り組みを始めた。 地域の小中学校の「テーブルマナー教室」への牛肉提供をはじめとする、おいしい良質の牛肉を知ってもらふ活動をライフワークとして続けている。</p>
	<p>福島県の畜産経営者</p> <p>成田牧場 成田 昌弘 様</p> <p>（酪農経営者から）</p>	<p>福島県猪苗代町</p> <p>家族経営による酪農経営 コスト分析を行って経営改善を図り、乳量及び乳質の向上を図っている。また、新規投資には慎重な姿勢であり、堅実な経営を行っている。 一方、今回の資材高騰前に自己資金で牛舎を整備し、家畜管理には常時モニタリングシステムを導入し、繁殖成績を向上、飼養管理の最適化に努めている。</p>

1 全日畜 畜産経営の危機克服ワークショップ(福島会場)の概要

日 時：令和5年9月12日(火)

場 所：グランパークホテルエクセル福島恵比寿

発表者：山本 高久 有限会社 東北ファーム 専務取締役

伊東 輝美 株式会社 伊東牧場 代表取締役

三品 重利 株式会社 アグリテクノ 代表取締役社長

鈴木 佳子 有限会社 鈴木畜産

成田 昌弘 成田牧場

(敬称略)

参加者内訳

生産者7名(発表者5名を含む)、事業推進委員会委員2名

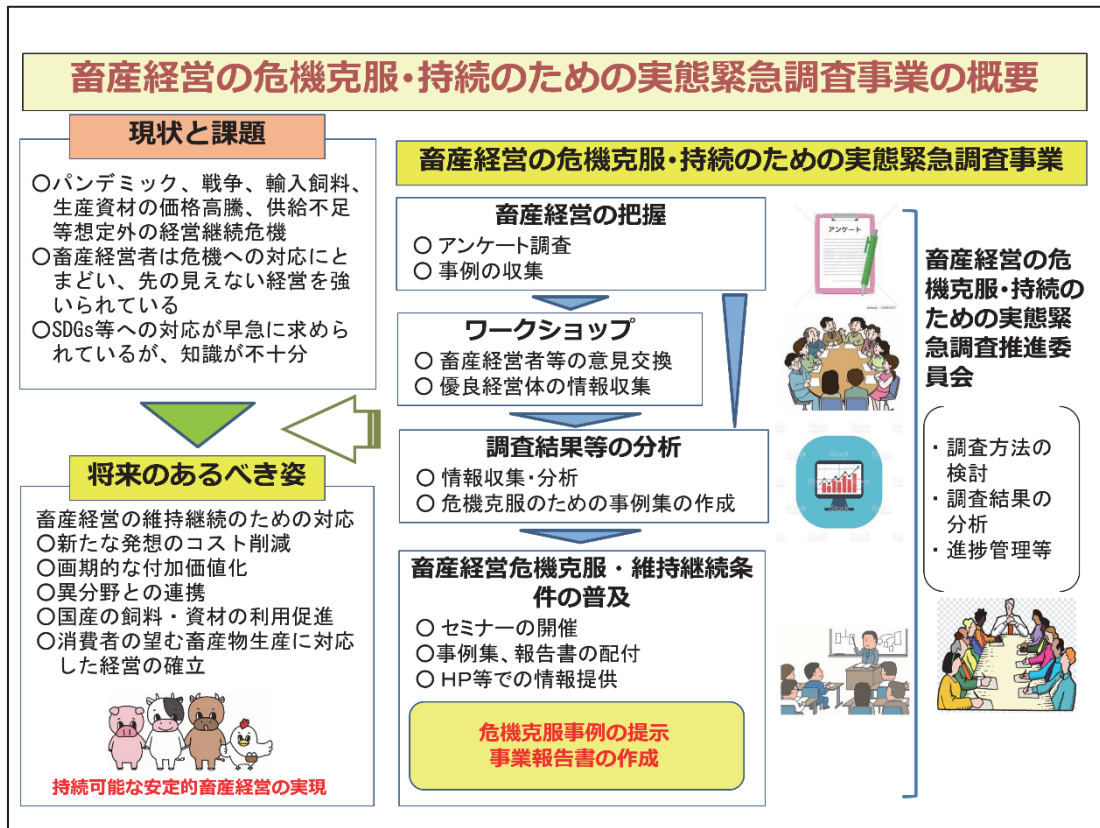
飼料メーカー等6名、畜産関係団体5名、金融機関2名

報道関係者3名、全日畜7名



(ワークショップ会場)

○ 事業の概要とワークショップの趣旨についての説明



畜産経営の危機克服・持続のための実態緊急調査推進委員会

- ・ 調査方法の検討
- ・ 調査結果の分析
- ・ 進捗管理等

近年、配合飼料価格や各種資材価格の高騰、さらに、新型コロナウイルスの蔓延、いわゆるパンデミックの発生に伴い、畜産物需要の低下、畜産物価格の低下という事態が発生。さらにロシアのウクライナ侵攻による物流の停止など、今、我々の畜産業界は、今まで経験したことのないような危機に陥っている。

しかし、いわゆる商系の飼料を使っている全日畜会員は、それを克服し、さらに発展させていこうという方々も多く、それらの事例を収集し、事例集を作成し、その事例の中から各経営者が該当する部分をピックアップして、経営の参考にさせていただくことで、日本の畜産の発展に資する事業。具体的には、まず全体を調べるためにアンケート調査を行い、平行して事例を収集し、ワークショップを開催し、危機を実際に克服し更に発展させておられる経営者とその関係者で討論してより深く検討し、それらを事例集にまとめ、公表する。

ワークショップ第一部 事例紹介

○ ゲストからの発表

発表者：山本高久 氏 （有限会社東北ファーム 専務取締役）



◆経営の概要

- ・青森県三沢市で、昭和 41 年合名会社東北ファームとして創業。1 万羽養鶏からスタートし、生産を中心に鶏卵の卸、販売を行っている。従業員は 160 名で、ベトナムからの実習生が 20 名いる。
- ・採卵鶏の成鶏 150 万羽飼養し、月間鶏卵生産量 2,200t。鶏ふんから年間 45,000t の堆肥生産をしている。グループ会社の成鶏農場として 2 年前に青森県八戸市階上町に有限会社ノースランド、五戸町に株式会社三誠ファームがある。また、新潟市の新潟営業所において、鶏卵の仕入販売の事業も行っている。
- ・昭和 61 年に、現在の有限会社に社名を変更し、平成 26 年成鶏舎設備更新を行い、110 万羽飼養規模にし、GP センターを HACCP の対応にして、飼養羽数が 150 万羽体制となった。
- ・令和 2 年に農場 JGAP の認証を取得。令和 4 年 12 月に、残念ながら鳥インフルエンザの発生が確認されて、139 万羽を殺処分した。
- ・農場面積は 40ha あり、鶏舎は 48 棟区分けして、一部ウインドレス鶏舎、農場入口には消毒施設を設置している。
- ・自社のブランド製品は、味乙女を中心にビタミンを添加している特殊卵などを販売。
三沢と青森市の 2 カ所で一部加工品、卵のお菓子、プリンなどを販売しています。自動販売機も設置して、規格外の小玉と大玉中心に低価格で販売をしている。

◆畜産経営における危機と経営への影響

- ・「畜産経営における危機と経営への影響」は、配合飼料価格や電気料金、資材等の高騰、高病原性鳥インフルエンザの感染です。資材や車両、部品、ひな代もありますが、インフルエンザになった後、資材価格の上昇分を生産販売価格には転嫁できず、経営はさらに厳しくなった。全羽数殺処分により、当然、生産もできなく、収入もなくなった状態でした。これに伴い、社員への給料や取引先、メーカーなどへの支払いに要する資金確保は重要課題となりました。今回の鳥インフルエンザ感染の発生により、会社全体の損失額も 70 億に及んだ。
- ・三沢市の農場の採卵鶏約 139 万羽飼養しており、県内 2 例目の、昨年 12 月 15 日に鳥インフルエンザが発生し、令和 4 年 12 月 15 日殺処分を約 2 週間で、知事初め県職員さん、自衛隊の協力で全て作業が終了した。その後、消毒、清掃行い、令和 5 年 1 月 21 日に全ての防疫措置を完了した。

◆危機克服への対応

- ・配合飼料価格高騰等生産コストの上昇については、配合飼料価格安定制度、青森県配合

飼料価格高騰緊急対策で、かろうじて経営を維持・継続した。

・鳥インフルエンザ防疫対策としては、殺処分を農場全体ではなく、最小限で行う分割管理を提案して、導入すべく、現在地域家畜保健衛生所と検討中です。社内マニュアルを同時進行で進めて、10月に分割管理をスタートする予定です。

・令和4年は26道県84事例が発生し、約1,771万羽が殺処分されて過去最多の発生となりました。そこで、青森県畜産生産者6団体の県配合飼料価格安定基金協会、県全日本畜産経営協会、県養鶏協会、県養豚協会が県に陳情して、青森県配合飼料価格高騰緊急対策が実施され、経営体を維持することができたので、大変ありがたく思っている。

・分割管理を実施するには、防護柵の設置や区域内で生産した卵の出荷に必要な機械を導入する費用がかなりかかるが見込まれる。また、飼育衛生管理基準を徹底するために、社内研修を実施し、人とももの両面の管理をさらに強化していかなければならないと思っている。

・当面は、鳥インフルエンザ防疫区域を広く設定しながら、早期に鶏卵生産を再開させるために、6月3日にひなを入れて、12月末ごろには90万羽を導入する。一部だけノースランドと三誠ファームから卵を出荷できたが、150万羽戻すにはあと1～2年ぐらいはかかるのではないかという見込みで、何とか頑張っている。

◆国や県の施策への要望

・国や県の施策への要望は、5つあり、1つは鳥インフルエンザに対する殺処分を最小限にする分割管理への投資に対する助成。2つ目は感染源とされる渡り鳥など野生動物の侵入防止柵の整備、車両消毒場所の設置などのための助成。3つ目は鶏の処分は生産者の経済的な打撃が大きく、消費者への鶏卵供給にも大きく支障をきたすので、鳥インフルエンザの発生した鶏舎とその周辺に限定すること。4つ目は鳥インフルエンザ発生農家に対する支援助成金の早期支払い。5つ目は鳥インフルエンザ発生農家に対する経営再建のための融資制度の充実です。

◆経営危機から学んだこと

・経営危機から学んだこととして、支援助成金など補償制度の必要性。

・分割管理の導入のメリットは、特定家畜伝染病、インフルエンザが発生した際に、殺処分の対象を限定することにより、鳥インフルエンザの発生リスクを低減し、鶏卵の安定供給に貢献できる。農場を分割して、施設及び飼養管理を完全に分けることによりウィルスの侵入リスク及び感染拡大の低減と衛生管理の向上にもつながる。

・分割管理の導入のデメリットとしては、初期費用に相当の投資がかかる。分割管理するかどうかは事業者自ら判断することが必要で、国や自治体からの支援・指導は限られている。今後は専門家の意見を取り入れながら、具体的なマニュアルが策定されて初めて、国や自治体から支援されるわけです。分割管理をしても完全に伝染病の発生を防ぐことはできない。ウィルスは目に見えないため、感染要因の特定が難しい。実際に鳥インフルエンザの発生農場で疫学調査の結果、長靴の交換不備や鶏舎の隙間、網の破れなどが確認された事例もあるが、必ずしも感染要因であるとは言い切れない。ネズミやハエ、粉塵、羽毛など、風で周辺環境に飛散して、家畜舎内に侵入し、感染した可能性もある。

◆持続的な畜産物生産（SDGs）の意識

・鶏ふんは発酵施設等を設置して、環境負荷の低減と鶏ふんの広域流通による肥料としての有効利用促進している。

・認証を取得している HACCP、JGAP のアピールで、消費者のニーズに対応しながら食の安全・安心に心がけて、高品質なクオリティの高い卵の生産を行っている。特に HACCP・JGAP、農業の管理 120 以上の項目基準の認証制度で消費者のニーズに対応しながら、高品質の卵の生産に努めている。

・食品安全、環境保全、労働安全、保健福祉の農場運営の要素を含む持続可能性を実現するための生産工程の実施をしている。

今年もまた渡り鳥が飛来するシーズンになりますが、10 月から国内初となる分割管理を導入スタートして、さらに万全に再認識することで進める。

発表者：伊東輝美 氏（株式会社伊東牧場 代表取締役）



◆経営の概要

・所在地は宮城県登米市中田町。宮城県でも一番北にあり、石森という地名は仮面ライダーを書いた石ノ森章太郎のふるさとで、経営形態は株式会社で、和牛の肥育一貫経営。

・経営の特徴は、ET による和牛のスマールを市場から導入し、育成から肥育までして出荷している。ET 和牛は育成肥育が非常に難しく、それ故、競合する農家も少なく、ET 和牛なら抜群の血統をそろえられるので、このような形態になった。

・農場は 3 カ所にありまして、2010 年にスーパーL 資金を活用して 800 頭規模の肥育農場を栗原市の有賀地区に建設した。2011 年に震災があり出荷停止になったが、このとき肥育に転換する最中だったので、幸か不幸か出荷できる牛がおらず、大して影響はなかった。

・2020 年に父親から引き継いで法人化して、私が経営者になった途端にコロナ禍になり、非常に大変な思いをしている最中です。

・その当時は、肥育牛は 6 割方が F1 でしたが、F1 はなかなかもうからなかった。することは和牛と同じことをしているのですが、F1 は酪農家で、ホルスタインの母牛に和牛の精液を受精するので、どうしても生まれた牛が品種改良が進んでしまったホルスタインの性質にひっぱられて、この 10 年でも生体歩留まりが悪くなったので、和牛のほうが簡単に肉になるのではないかと考えて和牛に転換した。

・HACCP 認証を取得して、牛の飼養衛生管理を徹底して経営改善に組んでいる。HACCP を取得しようとした動機は、高く売れるのではないかとと思って認証を取得したが、そういうことは全然なかった。

・畜産クラスター事業を活用して、哺乳ロボットとロールベアラーを導入した。哺乳ロボットは全部で 9 機あり、ほぼ 100%稼働中。ロールベアラーは、土地柄周りが全部田んぼなので、地元で手に入る飼料を効率よく集めようと思って導入した。

・経営従事者 12 名、雇用 8 名、家族 4 名のうち、現場は 10 名。家族 4 名のうち 2 名は私と弟の妻で、この 2 人で経理とその他のデータ管理をしている。

・飼養頭数は黒毛和牛が 1,650 頭。肥育牛の出荷は、年間 800 頭から 900 頭。早期肥育で出荷していて、和牛で常識的な 30 カ月齢の出荷ではなく、24 カ月齢で出荷している。問屋さんから賛否両論あるが、今の非常に餌代が高い中で 30 カ月も飼っておくと、まず利益が出ないのではないかという試算に基づいて年々早くした。

・飼料生産基盤は、自給飼料に関しては、2020 年に私が経営者になってから稲ホールクropp が 45 町歩。過去には最大で 80 町歩ぐらいしていたのですが、無駄になる部分が多かったので減らした。稲わらは、友人や近所の営農組合から買っている。デントコーンは、育成牛の TMR に入れるためと、堆肥を利用するために作っている。

◆畜産危機について

・2020 年ごろから餌が上がり始めて、私が経営を引き継いだ当時より、1 カ月当たり約 1,000 万の負担増になっている。素牛購入費用が増加したのですが、これも今、正直言ってチャンスなのではないかと思っている。

・去年の春頃まで F1 がスモール 1 頭で 25 万円で、そのときの和牛が 40 万円で、価格差が非常に縮んできた。利益率の悪い F1 から和牛に入れ替えるには今しかない、そのときにいた F1 の育成牛を出荷したらおしまいにして、今は全頭和牛になっている。

・父親からの経営継承時の借入金の返済の負担というのは、牛の場合、おおむね在庫として約 2 年抱えるので、この間に餌の価格の変動や枝肉相場の変動があるので、借りないで済むなら借りたくはないのですが、特にこの 3 年ぐらいは借り入れざるを得ない。

◆畜産経営危機の経営への影響

・今回の購入飼料高、資材高に加えて、父親から経営を継承した際の借金も引き継いでおり、和牛一貫肥育への転換等のため、運転資金の資金繰りに苦労している。経営を引き継いだときの借入金は仕方ないが、配合飼料に関しては飼料基金が出るが、そのほかの哺乳用のミルク、輸入牧草に関しては全然サポートがないので、ミルクの負担がかなり大きくなり、それが一番きつい、それと牧草の購入費で苦労している。

・金融機関から借入れ時には詳細な経営内容の提示が求められるので、毎月導入する牛の頭数、1 頭当たりの飼料コスト、1 頭当たりの平均導入金額を必ず出して、売上等バランスをとるようにしている。融資基準が厳しくなってきた、こういう経営の分析が大事なのではないかと思う。

・融資担当者は、こちらの経営状況を理解しようと努めてくれるが、感覚的な説明では相手も納得してくれない。どこが困っていて、この牛を出荷するときには恐らくこうなるだろうから、この部分で資金が必要だという具体的に客観的な数字を示しながら説明している。

◆畜産経営危機への対応状況

・配合飼料価格安定基金とマルキン制度の活用。

・和牛経営への転換。F1 は出荷して、もうかっていないのに、マルキンがどういうわけか出ない。F1 経営は日本でも指折りの超大規模な人たちしか残っていない、コストが

下がるところまで下がってしまっている。そういう人たちと、うちとでは勝負にはならない。一方、和牛は、まだまだ中小の農家が多くて、うちのコストは安いはずだと。それで和牛に転換した。

◆経営危機から学んだこと

- ・畜産に関する価格補償制度、支援助成制度は今以上に必要だと思う。
- ・資金、人、設備にゆとりを持つこと。まず資金に関しては、相場は常に動くので、資金にゆとりを持っていないと夜も寝られない。人に関しても、これからは他産業と同じぐらい休みがないと人は寄ってこない。設備にゆとりを持つことで、今は、新しい機械が欲しくても、注文から納品まで1年ぐらいかかってしまうので、できるだけ同型の機械を置いておいて部品を使うこと。このようなゆとりを持っていないと、求人を出して仮に面接に来て現場を見学したとしても、大変そうだなと思って誰も来てくれない。
- ・肥育管理のプログラムをシンプルにして、ワクチン接種も定期的に行う。肥育は、本当は簡単であるべきだと思いますが、いろいろな名人の方々のところに見学に行くと、そういう細かい工程が多かった。本当にその工程が必要なのかというところに立ち返って、血液検査等々を活用しながら、やりやすいプログラムにしている。
- ・肥育牛の農場は1カ所で800頭飼養しているが、ワクチン接種や出荷のときには2人で、それ以外の毎日の日常的な作業の体制は1人。初めから1人でやれるような牛舎を設計したわけではなくて、求人を出した結果誰も来なかったのが、私が、立ち上げの際に1人でやるにはどうしたらよいのかを考えた。まず、牛の健康を先読みできるように血液検査をして、常にイレギュラーな事態ができるだけ発生しないようにしている。

◆持続的な畜産物生産のあり方に対する意識

- ・昨今、盛んに言われるSDGsですが、これは農業にとってはごくごく当たり前のことなのではないかと思っている。例えば、50年前の近所の農業を見みると、必ずどの家にも家畜がいて、そこから出た堆肥で稲を作って、そのわらを食わせて牛を育てる。このサイクルをどこかで切ってしまうと、必ず近所から苦情がくる。臭いや、堆肥があふれかえるというような状況は、その地域の土地で、その畜産の事業を支えきれないという状況になっていると思う。
- ・私はうちの企業理念にもあるのですが、50年前のような循環型農業を今の科学的な技術と設備を使って効率よくやろうと思っている。
- ・HACCP認証を取得して牛の飼養衛生管理を徹底することにより、経営の改善を図っている。高く売れるのではないかと思ってHACCP認証を取得したが、牛肉に関しては高く売れることは一切なく、HACCP認証よりも地域ブランドのほうがありがたがられる。
- ・HACCP取ってよかったと思うのは、学生に求人を出すときに、学生はちゃんとやっている農場なのではないかと思って求人に応じてくれている。
- ・法令に基づくようなことで、私たちが足りない技術のことに関することとして、栄養関係に関しては飼料メーカー、ワクチンに関してはワクチンメーカー、病気の治療に関しては製薬会社等々から講師を派遣してもらって、定期的に勉強会を行って社員教育をしている。

・うちは、ET 和牛はスモールで導入するので、健康なスモールでないとならぬと和牛はあっという間に死んでしまう。ホルスタインや F1 に比べると、まるっきり別の動物なのではないかと思うぐらい和牛は弱いので、スモールを生産する酪農家にも来てもらって、我が社の社員と一緒に同じ勉強をしてもらって、できるだけ健康な牛を市場に供給してもらえるように努力している。

◆国、県等の施策への要望。

・畜産農家が安心して安定した経営ができるように、購入飼料価格補償制度の充実。配合飼料に関してはあるが、輸入牧草あるいは哺育用のミルクに関する補償制度があるといいなと思う。

・マルキン制度の充実については、国は、これ以上どうしろと言うんだと思うかもしれないが、実際に出た損よりも、マルキンは出ていないような気がするので、そこをもう少し出してもらいたい。

・酪農家との関係が非常にあるので、「乳牛」にもマルキンがあったら農家は助かるのではないかと思う。

・施設・機械等に対する補助及び融資制度の充実。今は金利が低いのでそれを利用すればいいのではないかとされるかもしれないが、農業は ICT を進めなさいと国は言いますが、正直、あれで儲かるのはメーカーだけではないかと思う。

発表者：三品重利 氏 （株式会社アグリテクノ 代表取締役社長）

◆経営の概要

・(株)アグリテクノは1961年に創業して、県北の福島県伊達市に本社を置いている。もともと採卵鶏のひなの生産と販売をしていたが、約35年前から採卵鶏の飼育、鶏卵の販売に特化した。その他、鶏ふんを堆肥化して、製造販売している。

・飼養羽数は、採卵鶏で170万羽。年間生産量で約3万トン。生産農場が7カ所あり、福島県に5カ所、宮城県に1カ所、茨城県に1カ所ある。卵をパッキングするGPセンターは、福島、宮城、埼玉に1カ所ずつある。

・販売エリアは、概ね東北地区への販売が約3割、首都圏への販売が約7割で、商品形態はスーパーのパック卵や業務用等様々である。

・一貫生産方式を取り入れており、ひな会社からひよこを仕入れて、雛から育てて卵の生産を行っている。育雛農場でひよこから約40日齢まで育てて、次に育成農場で約120日齢まで育てて、成鶏農場に移動して卵の生産を行っている。

・一貫生産のメリットは、自社でひなを育てるので病気のコントロールが行いやすく、ひな価格が安い。デメリットとしては育成場建設の設備投資、育成場での飼育やひなの移動、ワクチン接種などで、人が必要になってくる。

◆経営危機について

・畜産経営危機と対処については、様々な危機に立ち向かってきた。まず、新型コロナで



外食向けの販売が減り、ウクライナの戦争の影響による餌価格の高騰など、様々な困難があった。

・採卵鶏業界の中で一番の危機は、高病原性の鳥インフルエンザである。昨シーズンは84例、トータルで1,771万羽の鶏が殺処分された。これは採卵鶏の場合であるが、防疫レベルが高いとされる大手生産者の発生が非常に多かったことが特徴になる。非常に多くの鶏が殺処分されたため、卵の供給が減少して、市場はパニックになり、卵が入手できなくなったことで、主に外食関係がダメージを受け、消費が落ち込んでしまった。

・当社では昨年の12月に、育成農場で鳥インフルエンザが発生した。その農場では飼育していた約10万羽の鶏が全て殺処分となった。約4カ月間、清浄化のために鶏舎の使用ができなくなり、ローテーションが狂って取引先に迷惑をかけた。

◆経営危機への対処について

・経営危機への対処としては、今まではネズミや野生動物、人が鶏舎内にウィルスを持ち込むケースが多かったと考えられていたので、当社でも車両消毒や長靴の履き替え、ネズミの駆除など、基本的な対策を行ってきた。

・しかし、昨シーズンの発生は、農水省も認めていないが、空気感染ではないかと思われる事例が多かった。実際に発生した農場からいろいろ聞き取った情報では、発生農場は、先に発生した農場の風下の農場であったり、今までは人やネズミが持ち込むケースが多いというところで、下の段から鶏が死んでいくケースが多かったが、昨シーズンは上の段からの死亡が多かったという話を聞いている。

・当社では2つの具体的な対策を考えている。まず第1に、ウインドレス鶏舎の妻側にウィルスを取り除くフィルターの取り付け、2つ目は、鶏ふん処理の分別管理である。

・対策1は、当社の鶏舎は、鶏舎長が約100mで、8段ケージの鶏舎が多く、鶏舎後方にファンがついており、空気を引っ張って強制的に風を発生させて、鶏の体感温度を下げるトンネル換気システムを導入している。

・鳥インフルエンザのシーズン、冬場の換気システムは、外気温が低いので、メイン換気を天井のモニターカーテンからの入気に切り替え、ファンは最低換気にしていたが、そうすると、天井からウィルスが入ってくるリスクが非常に高くなる。近隣の農場で鳥インフルエンザが発生したり、近くで野鳥から鳥インフルエンザが検出されたりして、発生リスクが高まったときには、天井のモニターカーテンを閉め切って、完全トンネル換気に切り替えようと考えている。そして、鶏舎の吸気側にフィルターを取付けて、埃に付着して飛んできたウィルスを除去する対策を考えている。

・次の対策は、鶏ふんの分別管理による対策である。まず、当社が今までやっていた鶏ふんの発酵処理は、複数農場で出た鶏ふんを1カ所の鶏ふん処理場に集めて発酵処理していた。その場合、どこか1カ所鳥インフルエンザが発生してしまうと、そのウィルスを含んだ鶏ふんを鶏ふん処理場に持ち込んでしまい、さらにそのウィルスをほかの農場に持ち帰ってしまうリスクがあり、ほかの農場が鶏ふん処理場を使えない状況になってしまう。また、鶏ふん処理場で、割れた卵などを処理していたので、カラスが集まってしまい、そのカラスが鳥インフルエンザを持ち込むリスクもある。

・そこで今、当社が進めている分別管理では、各農場に縦型コンポを設置して、各農場でコンポで発酵処理を実施する考えである。縦型コンポで処理すると、鶏ふんの発酵温度が65℃から70℃ぐらいまで上がるので、完全にウィルスは死滅する。ここからペレット工場に原料として堆肥を持ち込んでも、ウィルスはない。鳥インフルエンザの対策としては以上の2つとなっている。

◆持続的な畜産経営に対する意識

・SDGs の取組について、まず、アニマルウェルフェアの取り組みとして、2017年に茨城県の桜川農場で多段式の平飼い鶏舎を建設した。設備に関しては、主要販売先の生協と話し合いを行って、先方の要望で自然の光と風が入るセミウインドレス鶏舎を採用した。セミウインドレスでなくてウインドレスで、光が入らない鶏舎でも平飼いとしては販売できるけれども、販売先の要望を取り入れてこのような形で生産している。

・ケージフリーの基準が日本には無いが、世界的に見て一番先進的なケージフリーの基準を持っているEUの基準を採用して生産を行っている。

弊社のケージ飼育でのウインドレス鶏舎は、1ロット3万～6万羽。当社では8段ケージを採用している場合が多い。1羽当たり面積で大体400cm²前後である。ケージフリーは、セミウインドレスとなっており、一番後方にファンがついていて、今年のように夏場が暑い時期などは強制的に風を発生させて、鶏の体感温度を下げるのが可能になる。1ロットで約9,000羽。1羽当たり面積で、EU基準の1,111cm² (0.1111 m²) で飼育している。

・多段式平飼いで、通常の育成システムだと、成鶏舎に入れたときに上の段に上がれないという問題がある。そのため、育成場に関しても専用設備となっている。成鶏舎は少し小さい設備になっていて、この段階で羽ばたいたり、飛ぶ動作を鶏に覚えさせることが可能になっている。100日齢で成鶏舎に移動している。夏場はカーテンを閉め切って、後方ファンで強制的に風を発生させて体感温度を下げています。

・平飼い卵は、コンセプトとしてはいわゆるNON-GMOのトウモロコシを使用した飼料を使っている。ケージ卵のパックは、脱プラということで、古紙をリサイクルしたモールドパックを使用している。卵の殻を混ぜ込んだモールドパックの使用も行っている。SDGsの目標番号で言うと12番と15番に該当する。

・平飼いに関しては、もともと2017年に4万羽からスタートしたけれども、非常に販売先から御好評を得て、今では12万羽のケージフリーの飼育をしている。

・その他、SDGsの取り組みとして、三陸の漁業を支援する共同プロジェクトを立ち上げた。漁業でとれるワカメは、食用になるものもあるけれども、主にワカメの茎が売れずに廃棄しているので、それを飼料化して、卵の生産ができないかと、このプロジェクトを立ち上げた。

・きっかけはコープ東北でプライベートブランドをつくりたいということで、コンペをするという話があり、ある飼料メーカーから三陸でワカメが余っていて、それを飼料化するまでは至ったが、製品化できていないので、それを使ってみないかと声を掛けられ、このプロジェクトが動き出した。今まで廃棄していたものの有効活用、フードロスを出さない

との観点から、バイヤーから非常に評価をいただき、幸いなことに採用していただくことになった。今では月間6万パックを販売。現在も宮城と福島の生協さんを中心に販売させていただいている。私どものSDGsの取り組みとしては以上になる。

・10月からまた鳥インフルエンザのリスクが非常に高くなってるので、当社としてもフィルター設置と鶏ふんの分別管理だけで十分足りているとは思っていない。養鶏業界皆で何が一番効果的なのかを話し合っ、業界で鳥インフルエンザを発生させないように頑張っていきたい。

発言者：鈴木佳子 氏（有限会社 鈴木畜産）



◆経営の概要

・石川町役場勤務であったので農業経営経験はなく、代表である夫と20代後半で結婚して、牛を育てるといふ大変さが分からないまま飛び込んでしまった。結婚してからも家業を手伝うことはなくて、夫とは別の職場で働いていたが、夫が育てた肉を求めのお客様が徐々に増えてきて、いつかお肉を販売できるお店を持てたらいいなと思うようになった。その夢をかなえるために、令和4年の3月に職場を退職して、本格的に家業を手伝うことになった。その後、令和4年の9月1日にお肉や加工品、堆肥等を販売するお店をオープンさせることができた。

・鈴木畜産は、福島県の中通り南部の石川町にある。経営形態は法人組織による肉用牛肥育及び肉牛の商品の販売を行っている。祖父が牛をセリに出すための仲介業を行い、2代目の父が牛の飼育を始め、平成10年に、法人化とともに「石川はちみつ牛」を商標登録した。平成29年に先代から事業を継承し、石川はちみつ牛のブランディングと加工品の販売を始めた。そして、令和4年9月に鈴木畜産 Office×Shop をオープンさせ、現在に至る。

・鈴木畜産では、はちみつは自然の食材で抗菌作用、疲労回復やストレス軽減に効果があると、黒毛和牛にはちみつを与えている。由来はそこからで、「石川はちみつ牛」という名前になっている。

・肉用牛生産部門は、現在、飼養頭数は約600頭、年間出荷頭数は240～250頭で、労働力は自家労働2人、従業員が4名である。飼料生産基盤は、自給飼料生産は行っていない。購入している稲わらは中国からの輸入となり、一部石巻から導入している。稲 WCS を250kg/ロール×1000ロールを購入している。

・堆肥を耕種農家に供給して、堆肥を生かした循環型農業を行っており、1シーズン10トンダンプ20台を会津方面へ運んで、敷料用もみ殻を水田農家から入手している。

・食肉加工販売部門は、平成29年から石川はちみつ牛のブランディングと加工品の販売を始めた。持続化補助金、福島県6次化ステップアップ補助金等を活用して、畜産加工販売店舗などを整備した。

・ブランド化に向けた第一歩として、デザインの重要性に着目して、ロゴマーク、パッケ

ージ、カタログ、ホームページ等をデザインのプロのデザイナーに依頼した。ロゴマークは漢字の「牛」と片仮名の「ハチ」のどちらにも読み解けるシンプルでスタイリッシュなものにした。その際、発明協会を通じて、類似デザインがないか著作権法の確認も行った。

- ・ 主軸となる加工品は、塩で食べる黒毛和牛ハンバーグ、ワサビで食べる黒毛和牛ローストビーフ、ちょっとぜいたくな石川はちみつ牛コロッケの3品になる。

- ・ 悩みどころの価格設定については、商工会から製造原価の食品加工に精通した中小企業診断士を紹介していただき、アドバイスを受けた。

- ・ このような新規事業に対し、石川町や商工会は積極的にイベント等で PR する機会を作ってくれて、応援していただいた。大阪、東京、福島市などで試食や物販をする機会をいただき、直接お客様の反応を見ることができたのは、その後につながる貴重な体験になった。

- ・ 6次化の販路拡大など煩雑な作業を助けてくれたのは商工会になる。担当者と有名飲食店に幾度となく足を運び、お客様に愛される味や価格などを市場調査させていただいた。都市圏でどう評価されるか知りたくて商談会にエントリーし、各方面から高評価をいただいたことは自信につながった。

- ・ 現在、石川はちみつ牛及び加工品は、ショップ、ウェブショップで購入可能。また、石川町のふるさと納税返礼品にもエントリーしている。なお、加工品については鈴木畜産の office×shop 脇に冷凍自動販売機を設置して、24 時間いつでも購入することが可能とした。お店がクローズの際や人に会いたくない、非接触でも購入できると大変好評をいただいている。贈答用のギフトボックスも用意しているので、ギフトシーズンは注文が増加する。お中元やお歳暮シーズンは商品が品薄になってしまうこともあるので、「お早めにお願ひします」とお客様のほうに宣伝させていただいている。

◆経営危機について

- ・ 畜産経営危機の要因は、1つ目が自然災害になる。12 年前の東日本大震災後は、食品販売の運営を休止せざるを得なかった。また、石巻産稲わらを利用していたため、セシウム含量の多い堆肥が5年ほど処理できず、野積み状態となり、環境問題が発生してしまった。2つ目は社会的要因になる。近年の飼料・肥料や燃料等の高騰及び電気代等のアップによる生産費の増である。

- ・ 畜産経営危機の経営への影響であるが、東日本大震災後の風評被害等による販売の減、及び堆肥処理不能。飼料費、燃料、光熱費の高騰による生産費の増。コロナ禍によるインバウンド需要の減による売上の減少。このような要因が、経営を圧迫していると言わざるを得ない状況。

◆畜産経営危機への対処状況

- ・ 畜産経営危機への対応状況は、当场では肥育素牛は北海道に足を運び、一定の導入価格で仕入れを行っている。牛肉については、首都圏を中心に相対取引を行い、問屋に直接納品している。

- ・ 飼料などの価格高騰に対し、配合飼料価格安定制度による支援を受け、運転資金は借入で対応した。

・ブランディングにより商品の付加価値を高めて販売し、補助金をうまく利用させてもらった。今後の牛肉の需要を増加させるために、地元小中学校のテーブルマナー教室に石川はちみつ牛を提供して、次世代を担う子供たちに良質でおいしい牛肉を知ってもらう活動を継続している。

・広く PR するために、地域における Web 配信イベント「ふるさと食体験！」に参加し、お勧めのレシピを紹介するなどの活動を行った。「ふるさと食体験！」では、石川はちみつ牛の切り落としを使って、このときはライスバーガーを作った。使われている食材は全て石川町産のものになっている。楽しいイベントだったと好評をいただいている。

◆畜産経営危機から学んだこと

・畜産経営危機から学んだこととしては、石巻産の稲わらを利用していたためセシウム含量の多い堆肥が5年ほど処理できず、野積み状態となり、環境問題が発生し、周辺の住民から苦情が出てしまい、地域住民との交流の必要性を強く感じた。また、環境対策の重要性を認識させられた。対策としては、堆肥舎の増設を行い、整備強化を行った。

・地域経済の活性化のため、石川町商工会、教育委員会など、関係機関が町を挙げて取り組んでくれることが、販路拡大の経営の安定化につながると感じている。経営危機は地域行政や住民などとの支援・連携を通じて乗り越えることを学ばせていただいた。

・6次化に取り組むに当たって、ブランド化に向けロゴマークやホームページのデザインをプロに依頼して、自信をもって進めたことは、成功の要因であると思っている。

◆国、県等への施策への要望

・国、県等への施策の期待ということで、物価高騰による生産費増が懸念されているので、運転資金の低利融資制度を継続して実施していただきたいと思っている。畜産農家が安心して安定した経営ができるように、購入飼料価格補償制度の充実、この2つに期待している。

最後になるが、堆肥がもっと身近なところで使われるようになればいいのという思いがあって、参加者を募り、プチトマトを植栽するワークショップを行った。ふだんあまり土に触れる機会がない子供たちと一緒に農体験を行うことができ、とてもよいイベントになった。このようなイベントを継続的に実施できればと思っている。

発言者：成田昌弘 氏（成田牧場 代表）

◆経営の概要

・成田牧場は、磐梯山の麓の猪苗代町にある。私は三代目、祖父が開拓で入植した。労働力は家族3人と、短大の後輩の息子を実習生として1人雇用している。

乳牛の飼養頭数は、6年前は経産牛が60頭程度であったが、新しい牛舎を令和2年に建設して、増頭し、経産牛115頭、未經産牛55頭、計170頭となった。生乳生産量は昨年の実績として880t/年であるが、目標は1,000t/年においでいる。



・自給飼料生産基盤は、牧草地が 20ha。共同草地（3軒で共同）は、2戸の共同利用で 65ha である。稲ホールクロープサイレージも、当初 25ha ほどあったが、稲のホールクロープでは少しパワーが足りないので、草地の改良と面積を少しでも増やすことに力を入れている。

・農業短大を卒業して、千葉で実習し、受精卵移植の技術も取得して、受精卵移植も進めた。しかし、最近は少し忙しくて自ら移植している時間がとれず、人工授精（AI）のみとなっている。

・令和 2 年に木造のフリーバーンの牛舎を政策金融公庫から融資を受けて建てた。その際、クラスター事業の利用も考えたが、年齢を考えると償還までの時間がかかること、事業採択から建設までの日数も考えるとお金を借りて、早く建設した方が良いとの結論になった。クラスター事業で取り組んだのは、ヘリングボーンパーラーと牛群管理システムのカウスカウトを導入である。

◆畜産経営危機について

・経営危機の要因としては、先ず、東日本大震災である。牧草が利用できなくなり、1週間搾ってすぐ出荷をストップして1カ月生乳を捨てた。私は会津だったので、浜通りの人たちより比較的被害は少なかったが、見えない物質に悩まされた。

・社会的要因は飼料、肥料など資材の高騰である。最近では燃料・生産資材の価格高騰、電気代もぐっとアップして、生産費が増えた。去年は、前年度から比べれば 1.5 倍、2 倍近くの飼料代となってしまった。

・人的要因は、家族 3 人と実習生の 4 人でやっているもので、過重労働になっている。人手不足、人をどのように見つけてくるかが課題である。県のホルスタインの改良同志会の会長もしているもので、他県に行ったときにいる若い人たちにも声をかけるがなかなか来てくれない。設備投資して規模拡大したので、人手不足をどのように補っていくかは悩みの種である。

◆畜産経営危機への対応状況

・震災の影響で牧草地も使えなくなったことへの対処としては、一時は輸入粗飼料ばかり使っていた。現在は、牧草は使えるようになったが、使うときは、やはり毎回毎回検査して、大丈夫だということで牛に与えるようにしている。

・輸入粗飼料は震災後しばらく 20~30 円/kg であったが、現在コストが高いので、やはり地元の土地や景観を守るにはいい牧草地がないとだめと考えている。最近では牧草地の有効利用に力を入れている。

・濃厚飼料の購入代は、危機前の 2 倍まではいかないが、1.5 倍に増えた。労働力不足は、酪農ヘルパーという制度も利用しているが、やはり頭数の割合で、1 回頼めば 10 万円ほどかかってしまう。やはり 10 万円でヘルパーを 1 晩頼むのだったら人を雇ったほうが良いとの考えになっている。

・飼料高騰への対処は、自給飼料の確保であるが、牧草をどれだけ生産できるかである。自分で作るためには機械も必要なので、機械もある程度は整えた。それでも、朝、トラクターに乗って草刈りに行って、父が集草して、私がロールする形で進めて、朝から晩まで

ロールづくりをしなければならない。収量が下がってきたので、4.5ha ほどの牧草の更新を行った。

・今まで父の手づくり牛舎で飼養してきたが、生産資機材の高騰への対処として、カウコンフォートの観点からも、やはり牛がつかう感じ、フリーバーンにした。理由は、堆肥処理のことを考えた際、スラリー状で出すより、少し山盛りにできるから。ベツトはもみ殻のみで、自分で 60ha 分ぐらい集めたり、農協のカントリーエレベーターからもってきたりして調達している。

・牛舎の整備により、今期は今まで獣医にかかっている。一時期、獣医が来て、2頭も3頭も見えていくことがあったが、そうすると半日仕事ができないので、その点では良かった。牛飼いとて千葉県長嶋さんから「牛を見ろよ。ちょっとしたシグナルも見落とすなよ」と言われてきた。私も牛を見るように今の実習生には、口酸っぱく言っている。ちょっとした発情の行動や素振り、子牛の下痢、耳垂れ、せき、ふんの状況も全部見るように指導している。

・労働力不足の対応としては、当初はロボット搾乳を考えたが、見栄えは良くとも、何年か後の設備の部品供給が止まったり、サービスマンのスキルの状況を考えて、ミルキングパーラーが無難かなと考えた。スマート技術のカウスカウトは、発情、採食量、行動量、全部分かるようなシステムになっている。発情を見落とすようなときでも、朝晩パソコンで確認して、種付けすれば、妊娠しており、うまく利用している。

・飼料調製、飼料給与は、ミキサーで行っている。ふん尿処理はローダーで切り返して、猪苗代の堆肥センター運んでいるが、畜産農家が少なくなってきたので、数軒しか利用していない。全て運ぶこともできるが、当場に撒く分は確保しておくようにしている。

・新しい牛舎を建設した際に、トイレとシャワーを設置した。トイレはやはり女性もいたりするので設置している。シャワーは夜中などにお産が終わった後、血まみれになっていてシャワーを浴びて帰ることも、この3年の中に2回ほどあり、設置した。

◆持続的な畜産経営に対する意識と将来への夢

・牛群改良協議会、改良同志会などのネットワークを通じて、生産性向上の勉強を互いに相談してやっている。地域の耕種農家とは、水田の稲 WCS 生産、耕種農家の水田へ堆肥の還元を通じて連携している。地域資源の活用による飼料自給率の向上で、水田の飼料用米やトウモロコシの自給飼料確保。地域循環型畜産の構築として、牛→土→作物→牛の循環型資源利用を実現している。スマート畜産技術を活用した労働力の節減、生産性の確保をしている。

・将来の夢でもあるが、仲間が少なくなってきたので、仲間のいる勉強会や共進会には率先して出ていき、楽しくやりたいと思っている。子供が4人生まれて、父ちゃんも稼がなければならないので、子供たちに命の大切さも伝えて、自分も父の背中を見て牛屋になったので、そういうふうには育たらないなと心の片隅に思っている。

・クラスター事業などはメーカーの助けにしかならないような気がする。自分も努力して、自分で稼いだお金で機械を買うなり、勉強もしていかないといけないと思っている。必要なものは買うという形でいきたい。地域の集まりなどに出た際も、話をしていると必

然的に藁持っていけなど、そういう話になるので、やはり地域の人たちとも連携しながら、結びつきが大事だと思っている。

最後に、毎月 15～20 頭も分娩すると哺育が大変なので、次の投資は哺育ロボットかなと思っている。それもメーカーさんに粉ミルク 1 カ月 30 袋も使うから、融資してもらって導入したいと思っている。

司会：松原英治（全日畜専門員）

・第一部を終了する前に、貴重な報告をいただきました 5 人の方々の内容について、質問や、補足をお願いしたいことについて、全日畜の内田専門員、神谷専門員からまとめてもらいます。

内田賢一（全日畜専門員）

・東北ファームの山本さん、アグリテクノの三品さんには、農林水産省からの鳥インフルエンザ発生農家に対する補償金の支払いが遅れていて、資金繰りに困っているという話をお聞きしました。補償金の支払いが今でも遅れているのかどうか。遅れているとすれば、その理由などについて教えていただきたい。

・伊東さんには経営継承について苦勞されているということですが、伊東さんの体験から、スムーズに経営継承方法についてお聞かせください。

・鈴木さんと伊東さんに、これからインボイス制度が始まりますが、インボイス制度への対応をお聞きかせください。

・報告者の皆さんに、危機発生時における従業員の給料や取引メーカーなどへの支払いなどの資金繰りについて聞きかせください。

・また、経営の危機に際して、その対応策についていろいろな方面に相談されたと思います。経営危機に対して参考になったアドバイスがあれば、教えていただきたいと思います。

神谷康雄（全日畜専門員）

・高病原性鳥インフルエンザについて、東北ファームの対応とアグリテクノの対応が若干違うところがあるので、アグリテクノでは、東北ファームは分散管理で進められているのに対して、アグリテクノは、分散管理だけではなくて、さらに鶏舎の換気システム整備が必要取り組まれている。この鶏舎の換気システムについては、誰か専門家からのアドバイスはあったのか。あるいは、投入コストなどはどうなのか。もう少し補足的な説明をいただきたい。今、国は分散管理ということで対策を進めようとしている。アグリテクノは、さらに一歩進んで、鶏舎の換気システムを問題にして対策を講じようとしておられるが、その背景を補足説明して欲しい。

・鈴木牧場は、お父さんからの遺産があったかと思うけれども、かなり地域の住民との協力でブランド化がうまくいったと感じた。はちみつ牛のブランド化は、行政も相当関わったと想像するので、その部分をもう少しお話しいただきたい。

・成田さんは、牛舎も新しくなり、ミルクパーラー、カウスカウトなどハード、ソフ

トが改善されているが、非常に新規投資に対して慎重で、恐らくお父さんとの相談の中で、着実に設備投資をして、この危機をうまく乗り越えられていると感じている。とにかく投資に対する慎重姿勢に感銘を受けた。

・搾乳ロボットの導入はやめて、機械設備に対する投資などに対して非常に慎重に行われている。そこで、なぜ木造の牛舎にしたのか。それには誰かのアドバイスがあったのか。あるいは、親子で話し合われて決めたのか、お聞きしたい。

ワークショップ第二部 意見交換

○ 発表者の補足説明

発言者：山本高久 氏 （有限会社東北ファーム）

・鳥インフルエンザ補償金では、家畜保健衛生所とのやり取りを始めてから9カ月たったが、その間、いろいろ対応が遅く、餌をどのくらい使ったのか、そのときのひなの状況はどんなのかなどで、何回も書類のやり取りがあった。その後、返事がくるまで2～3カ月程度かかっている。

・県が精査して、農水の担当課に書類が上がったという連絡があり、11月ごろには入るのではないかと連絡をもらっている。

・6月からひなも入っているので、ひな代もかかり、飼料代も、従業員の給料もかかっている。幸い、ノースランドと三誠ファームと2つ農場を持っていたので、従業員を休ませずに雇用できたが、かなりの費用がかかっている。

・日本政策金融公庫さんの協力で何とかつないで、配合飼料価格補償と県の緊急対策のおかげで何とかしのいでいる状況でした。

・また、鳥インフルエンザの保険に入っており、2,000万ぐらい年間掛け金を払っていた保険で5億出たので、当面何とか凌げた。

・全てのものが高騰しているし、補助金をもらったとしてもとても足りないぐらい今は費用がかかっているの、早く鳥インフルエンザの補償金を支払ってほしいと期待している。

発言者：三品重利 氏 （株式会社アグリテクノ）

・昨年の12月に育成舎で鳥インフルエンザが発生した。その後、書類のやり取りや、農場の立ち入り検査、農場側に管理不備がなかったかどうかの確認があった。

・監査では、当社の発生農場は比較的新しい農場で、建てて3年ぐらいしかたっていない農場なので隙間もあいていないし、ネズミもないということで、問題はなかったというやり取りをして、スムーズにいった。

・補助金に関してはまだ出ておらず、何の連絡もないような状況。恐らく昨シーズンは今までないぐらいの発生件数、羽数があったので、手続が遅れているのではないかと

いる。こちら側としても非常に不安になってしまいますので、できれば連絡なり何かアクションを起こしてもらいたいと思っている。

発言者：伊東輝美 氏（株式会社伊東牧場）

・2019年までは父親の個人経営でした。肉牛の場合、肉牛免税があるので所得税は払わなくていいのです。その一方で、法人としか取引しないよという業者も当時増えてきていて、法人化すると私が言ったときに、肉牛免税があるのにそんな無駄なことをするのかと言いました。

・しかし、法人化しないと、周りから相手にされない。求人を出しても、個人経営には人は来ません。法人としか取引しない業者も出てきていたので、ぎりぎりのタイミングで法人化してよかったと思っている。

・父親はいまだに納得していないだろうとは思っている。君臨すれども統治せずで、一切を現場に任せてくれればいいのですが、現場と少し違う、自分の経験則の中でやらせようとする。

・個人経営での資産のほとんどは、土地、建物、牛なので、私と弟が相続するときに、経営に係わるぐらいの相続税を払わなくてはならない。

・事業承継をするという観点からすると、20年ぐらい前から各金融機関や税理士からは、法人化しないと大変なことになるよと言われて続けていた。大変なのは当代ではなく次代です。

・税金はどこまでいっても逃げられない。そこを節税しようというよりも、潔く払う覚悟を決めるしかないと思う。

司会：松原英治（全日畜専門員）

・肥育経営での育牛経営でインボイスについての補足をお願いします。

発言者：伊東輝美 氏（株式会社伊東牧場）

・基本的に家畜市場のセリで買っているのですが、それに関しては考えてなかった。インボイスは、消費税の免税事業者と取引が牛以外のものである場合、相手の重要度による。相手に余計に払っても良いし、冷たい言い方かもしれないが、この人につき合っても先がないのであれば仕方ない。消費税は平等であるべきだと思うので、今まで免税事業者がいたことに関して少し疑問を感じている。

発言者：鈴木佳子 氏（有限会社鈴木畜産）

・年間3億円の売り上げがあり、そこで8%、大体2,400万円のマイナスの影響を及ぼすということになる。小さな業者がインボイス制度をうまく理解できていなくて、その後の手続をしなくて現在に至ると言うところになってしまうと、こちらがマイナスになってしまうので、そこは確認しながら、こちらの負担にならないように慎重に進めていくべきと思っている。

司会：松原英治（全日畜専門員）

鳥インフルエンザ対策が、山本さんが分割管理、三品さんが分割管理プラス換気システムですが、三品さんは専門家のアドバイスがあったのかについて補足説明をお願いします。

発言者：三品重利 氏（株式会社アグリテクノ）

・専門家からのアドバイスは特にありません。取引先で全農畜産サービスさんの、ワクチン用卵の農場でフィルターをつけて、外部から鳥インフルエンザが入らないように対策をしていたので、当社に来て提案していただき、当社でも導入するに至った。

・フィルターによる鳥インフルエンザ対策に至った理由は、福島県には生産農場が5カ所あり、そのうち4カ所が1カ所にかたまっている。半径6～7キロぐらいのところに4カ所点在しており、どこか1カ所で鳥インフルエンザが発生してしまうと、空気に乗ってほかの農場に拡散するリスクがあるのではないかと考えて、フィルター採用を決めました。

司会：松原英治（全日畜専門員）

・鈴木さんは、地域や行政から非常に大きな支援をもらい、中でも行政が非常に熱心に支援していたという印象なので、もう少し補足をお願いします。

発言者：鈴木佳子 氏（有限会社鈴木畜産）

・行政の関わりでは、私が鈴木畜産で働く前の前職が石川町役場で勤務しており、鈴木畜産で事業を始める段階から、役場と鈴木畜産の信頼関係ができていた。石川町としては一生懸命やる事業所を全力で応援するというスタンスだったので、こちらもその町の思いに反さないように一生懸命一緒になって取り組んでいった結果がこれかなと思っています。

司会：（松原英治 全日畜専門員）

・成田さんは、非常に慎重に考え抜かれた投資をやっておられる印象ですが、これはお父さんのアドバイスですか、又は、ほかにアドバイスしてくれた方がおられるのでしょうか。

発言者：成田昌弘 氏（成田牧場）

・伊東さんも同じだと思うが、父とは、仲がいいようで悪いところがある。若い人の言うことは、父はつぶしたがる。「俺はあちこちで見てきたよ」と言ってもだめである。搾乳ロボット導入も夢ではあったので、まず、あちこちのいろいろな牧場を見たり話を聞いたり、餌屋、設備屋、機械屋さんを回っていろいろ聞いて、そのトータルでおやじと話した。

・まず、搾乳ロボットにすれば、1台3,000万円以上するロボット2台の導入が必要で、最低120頭の搾乳牛が必要であった。その分牛の導入もかかるし、施設の設備投資も当時鉄骨で建てると、総投資が4億円近くかかる試算になった。果たして私が死ぬまで払い切れるか考え、息子たちに借金を残さないようにするためには、もう1回リセットして木造

になった。

・たまたま実習先であった千葉の牧場も、ちょうど私が行ったときに投資して牛舎を建てたばかりで、そのレイアウトや作業の動線を全部体で覚えていたので、今のフリーバーンのヘリングボーンパーラーの搾乳が理に合っていると判断して進めた。

・アドバイスは特に受けはないで、「百聞は一見に如かず」であちこち見て、どれが自分のうちに合っているかということを探した。そして、作業体系、例えば牛小屋もそうであるけれども、トラクターの圃場作業も、この機械を買ったときにどういう仕事をするかということも、会社で言う会議になるかもしれないけれども、うちの中で家族会議を開いて、このぐらいかかるけれどもこうだよということで、相談しながら決めていくという形にしている。

・搾乳ロボットは、話題性もあるからやりたかったが、資金と返済をどうするかを考え思いとどまった。

司会：松原英治（全日畜専門員）

・危機に遭遇した場合、その対応策について、最も参考になって力強いアドバイスをもらったというお話があれば聞かせていただきたい。

発言者：山本高久 氏（有限会社東北ファーム）

・鳥インフルエンザから1日でも早く復活したいということですので、1回発生したけれど、次またいつ発生するかもわからない。今できることを、維持管理を徹底しながら、農場はJGAP取得しているので、もう1回見直しをしようということで会社一丸となっている。

・空気感染も言われますが、私の考えは、管理するのは人だと思っているので、いくらルールをつくっても、破る人もいると思っている。さらにやり方を工夫して、従業員は農場に入る靴は白と決めているが、外部の人が鶏舎の中に入るときは専用の黒い長靴にするなど、色で一目でわかるようにすることも追加して、両面で行っている。

発言者：伊東輝美 氏（株式会社伊東牧場）

・抱える問題は同じ業種だと一緒なので、肉用牛の農家だけ集まっても解決策は出ません。うちがやっていることは、正直言って肥育の王道ではないと思う。

・和牛は生後30カ月以上まで飼って肉のうまみを凝縮するという世の中のおおきなルールでやっているが、どう計算しても、最高の仕上がりになったとしても、今の状況では絶対利益は出ない。

・いろいろな人の話を、養豚のコンサルの先生に話を聞いたり、養鶏のコンサルの先生の話の聞いたりすると、品種改良とともに飼養日数がどんどん縮まってきたが、和牛に関しては長く飼うのがいいことだとなっている。餌が安ければそれでもよかったが、今のように1日当たりの餌代がとんでもないことになってしまうと、それが通用しないと思う。

・結局、誰がお金払ってくれるかということと一般消費者なので、その消費者に何を求めるの

か。友達などにも聞くと、「もっとリーズナブルに」が必ず一番に来る。味やサシは言わない。

・衛生管理について、今一番重要なアドバイスをもらっているのは、大規模酪農家の経営者の方のアドバイス。

・その他は、メーカーにいる同級生や、商社の営業部長に会って話をすると、高付加価値しか残る道はないのではないかと。そう考えたときに、和牛はそれ自体が高付加価値で、日本でしか生産できないものなので、そうすると残れるのではないかと思う。

・現状、国内で和牛肉はさばき切れていないので、輸出されているが、その場合、果たして海外の人が地域ブランドとして、この小さい日本のどこの牛だということを認識するだろうか。和牛の飼養月齢を気にするだろうか。そう考えると、もっと効率よく和牛の血統としての資質を引き出す方法があるのではないかと思っ、2020年より前からずっと飼養日数の短縮に取り組んできて、今年まで飼養日数の平均で100日縮まって、枝肉重量はほんの少し下がって格付けは横ばい。だから、アドバイスは同業者からもらわずに、ほかの業種の人たちからもらうようにしている。

発言者：三品重利 氏 （株式会社アグリテクノ）

・年が近い若手経営者で集まる機会が年何度もあり、そこでアドバイスとか意見交換をしながら、危機に関しての対応を情報共有して乗り越えているような状況です。

・例えば、餌の高騰に伴って、我々鶏卵業界のほうも値上げが必要になった。できれば餌が上がった分、一気に値上げしたいところだが、取引先の量販店などは一気に値上げはなかなか呑んでいただけないような状況が続いて、段階的にやるという話を同業若手経営者と話ししながら、全国でタイミングを合わせながら、何とか値上げをのんでいただいたようなことがありました。

・鳥インフルエンザに関しても、同じように皆さんで情報共有して、うちでフィルターを取り入れるというので、ある関東の大手養鶏場もうちもやってみようかなと採用を決めたらしいです。私としては若手経営者さんの集まりで情報共有して決めるということをやっている。

発言者：鈴木佳子 氏 （有限会社鈴木畜産）

・鈴木畜産としましては、その分野分野でお世話になっている精通者の方から、その都度都度でアドバイスをもらっている。

・例えば、新しい事業でショップが必要だなというときは、商工会さんからアドバイスをいただきますし、ブランディングのことで相談したいことがあるなというときは、デザイナーさんからアドバイスをいただいている。飼料などの面でも精通している方の御意見を一番に聞かせていただいて取り入れて、相談しながらやっている。

発言者：成田昌弘 氏 （成田牧場）

・私のうちに来ているコンサルの先生は全国各地飛び回っている先生なので、一時期子牛

が売れない、ホルの雄が殺処分だという時期の頃に聞くと、今は踏ん張れと。今残れば勝ち組になれるから、今は件数が減っているから、だから、今残った者がずっと残れるはずだということで、今は耐えろ、そうすれば残れると言われていました。

・北海道の友だちも設備投資して、返済始まる頃この状況で大変だと聞いている。搾乳ロボット5台あったところがもう売りに出されている。そういう話をあちこち聞くと、「今は耐えろ」です。

・国の施策でどうこうしなさいというのはかえって逆になっているところがある。

○ 会場参加者全員による意見交換

司会：松原英治（全日畜専門員）

・まず、配合飼料価格の高騰が大きな問題になっており、その対策で大変大きな役割を果たしておられる福島県配合飼料価格安定基金協会、三品理事長に御意見を伺いたい。

発言者：三品清重 氏（福島県配合飼料価格安定基金協会 理事長）

・昨日も福島県庁で知事に畜産関係の団体の要望書を提出してきました。餌の高騰、高値が続いている中で、これから日本の畜産をどうやって維持していくかということで、国の補助金で安定基金制度の中の異常基金で、高騰の半分ぐらいを補助金で応援していただいた。

・しかし、今年の第2四半期ぐらいでほとんど国の補助金がなくなってしまいます。今までの基準価格の決め方が、1年間の平均価格と値上がり分の差額を出していました。それが2年半に延長されて、何とか補助金をつないでいたのが、それでもずっと高値安定で、2年半の平均をとっても、若干今、餌が値下がり状況なので、差額が出なくなってしまいました。そういうことで、何とか福島県単独で畜産への支援をお願いしてきた。

・今年の第1四半期も、トン当たり2,700円県として出してもらっている。それと積立金の300円を入れて、トン当たり3,000円の補助金で、令和5年度は予算化されているので、3,000円は何とか援助していただけますが、とても3,000円では大変なので、何とか増額をお願いをしてきた。

・円安に加えて、ウクライナの戦争が終わりそうもないので、餌に関しては下がる要因がない。ただ、アメリカの穀物等の収穫予想が結構良いらしいので、また第3四半期も下がるのではないかとされていますが、いずれにしても32,000円ぐらい上がっていますから、これが下がったとしても27,000～28,000円は以前よりもずっと高い。

・このコストをどうやっていくかということ、卵に関しては餌の価格が生産費の6割ぐらい占めているので、生産価格に何とか上乗せをして販売していかないと、この業界は継続できていかない。県としてもその辺を少しでも増額して応援をお願いしてきた。



発言者：高原一司 氏（日本政策金融公庫 福島支店農林水産事業統轄）

・今日御発表いただいた方からは、融資制度の充実、継続ということで御要望をいただいている。日本政策金融公庫としては、こうした危機にある経営者の皆様に最大限御支援をするべく融資制度をそろえている。

・厳しい経営状況におありになると思うが、先ほどお金と人と設備にはゆとりを持たせるというお話もあり、先を見越して早め早めに御相談をいただき、我々もしっかり経営者の方と対話をして、一生懸命支えていきたいと思う。

・こういう時期ですので、なかなか公庫単独で融資が全部まかなえるということにもならないかもしれませんが、その際には民間の金融機関であるとか、そのほか関係する皆様と連携をとりながら、最大限御支援をしていきたいと思います。



発言者：安藤陽一 氏（株式会社安藤物産 代表取締役社長）

・先ほど三品理事長からお話があった配合飼料の場合は、飼料基金の補填なり、国のほうでも異常補填、県からも補助をいただいて助けにはなっていると思う。

・畜産の価格がそれに対応して上がってくれば問題はないのですが、ほかの要因もあってなかなか上がってこない。特に福島県の場合は風評の被害もある中で、再生産を続けていくのは大事だと思う。

・いろいろ補助はやっていただけますけれども、タイムラグがあって対応できない。すぐ即応性で対応できるような補助をやっていただきたいというのが一番です。生産者がやめてしまってから補助をつけても何もなりませんので、事業を継続できるような即応性のある補助を一番やっていただくと助かる。



発言者：安井 護 氏（協同組合日本飼料工業会 参事）

・お聞きしながら危機にはいろいろな種類があり、人手不足や地元とのあつれき、経営継承などのじわじわとくる危機と突然ドーンとくる危機と2つある。

・飼料高はどちらなのかって考えると、ジワジワきていた。これまでも突然上がるのはこの20年ぐらいで3回ぐらいあって、今回も2年3年前から始まりましたが、ジワッときてドーンと上がった。過去にも同じようなことがあったので、地震と同じで突然くるように見えるけど、過去を振り返ればある程度は、まだ推定できる範囲かなとお聞きしながら思った。

・粗飼料は自給という道があるが、濃厚飼料は国内自給は難しく、今、国は子実コーンを進めているが、年間1200万トンの輸入トウモロコシを代替できる訳ではない。それをどう代替するかで、価格の問題もあるが、国産飼料米を使ったり、未利用資源、例えば、今日話のあったワカメなどの利用などがある。



・私が今日来て一番驚いてすごいと思ったのは、伊東さんの 24 カ月早期肥育で好成績のこと。限られた資源、輸入コーンですが、それを効率的に使うというのは飼料高に対する大きな答えの 1 つかなと思った。

・とは言っても、皆がうまくいくわけにはいかないもので、価格転嫁が重要で、飼料価格、生産コストが上がればきちんと販売価格に転嫁できるように業界団体としても強く国に要望している。

・一時的なカンフル注射を打ったとしても、それは一時しのぎなので、コストが上がったものはきちんと販売価格に転嫁できるような体制をつくってくれということは、かなり強く言っています、やっとな畜産、そして農作物全体でも議論が始まっている。適正な価格転嫁というのは大事なことと思っている。

発言者：遠藤貴史 氏（フィードワン株式会社 養牛課長）

・飼料価格について、概況はシカゴ相場のコーンは下がってきているのは皆さん御存じだとは思う。一方で、餌はコーンだけではないので、ほかのものは外国に対して買い負けているのが現実だと思う。

・1 例を挙げれば綿実。昔は綿実について、オーストラリアから日本しか買わなかったが、中国が 3 年前に注目し、人口が増える国は必ず酪農を始めるので、綿実がどんどん買われていってどんどん値段が上がりました。

・輸入牧草も、昔は日本人と韓国人しか買わなかったが、中国と中東で酪農が始まって、日本が安く買っていた牧草を買い始めた。

・輸入価格は、シカゴ相場の需給バランスで動いているが、相場で動いていないもの、相対で買うものは日本が買い負けているのが現実。コーンなどのマーケットものは需給で動いているので、どこかで落ちつく。問題は相対で外国から買っているもので、安いものを頑張って探す、最終的には買う力と日本国内のインフレ率とうまくリンケージするといいかと思っている。



発言者：川村治朗 氏（危機克服推進委員 千葉県配合飼料価格安定基金協会 常務理事）

・安井理事のお話のように危機には、突発的な危機というのがあって、鳥インフルエンザも、福島原発事故も、あるいは台風もある。そういう件に関しては、行政とうまくつき合って、いち早く補助金を引き出すようなことをやっていただくほうがいいのかなということを感じた。

・じわじわくる危機に関しては、皆さんいろいろな経験や情報をあらゆる人からとって、それぞれの壁を乗り越えていて素晴らしいと思った。

・三品さんの鳥インフルの関係で、通気口にフィルターをつけるという話があった。千葉県では 2 年連続で発生している農場があり、そこも盛んに通気口が問題だと県にも要請に行っている。



- ・鳥インフルの関係は、補助金を早く出してくれという話です。私も県職員だった時は言えなかったが、今の立場は違うので言える。しかし、非常に難しいと思う。
- ・分割管理なども、危機管理の1つとしては大事ですが、根本は何かということ養鶏団体が国に要請していかないと、最近では毎年起きるのではないかと思います。千葉県も毎年同じところで起きている。恐らくこのウィルスは感染力が強いのだと思う。
- ・鳥インフルエンザのウィルスは、農場の中でも飛んでいってしまうのであれば、(対策には) 限度がある。養鶏業界でどうにかして国に対していろいろな方策を考えてもらい、今やれることはやっていただいで防いでいただきたいと思う。

発言者：由良 武 氏 (青森県配合飼料価格安定基金協会 参与 東北全日畜事務局長)

- ・危機対応について、皆さんの発表を聞いて本当にすごいなと感じました。出来れば多くの方々に聞いていただければと思いました。
- ・鳥インフルエンザについて、東北ファームさんの発表資料の最初のページを見ていただきたい。農場全景写真です。農場全体で40haありこのなかには、鶏舎48棟とGPセンター等の関連施設があり採卵鶏約130万羽が飼育されています。鶏舎48棟のうち32棟がウインドレスで16棟が昔の鶏舎です。



- ・鳥インフルエンザが最初に確認されたのは、ウインドレス鶏舎棟の外側の棟です。昔の鶏舎から一番遠い鶏舎です。
- ・識者？の話では、換気口の隙間からスズメ・ネズミ等が侵入し罹患したのではないかとの話も（侵入が容易と思われる昔の鶏舎は無感染）
- ・私は、識者に言いたいのが、確認当日の前4～5日の気象条件を検討して頂きたいとします。当時は寒気がきて5～6cmの積雪量となっています。このような状況下でネズミは移動しません。ましてや、ウインドレス鶏舎の外装をよじ登って換気扇の隙間からの侵入は難しい。また、スズメ等の小鳥については悪天候時には集団で行動するが多い。
- ・また、一部の識者は鶏舎で作業する従業員による感染を疑うべきであると指摘しているが、この農場はJGAP認証を取得しており、職員の勉強会開催等を定期的に開催し飼育管理や作業などの記録をのこしているのだからこれらを何度も再チェックしたと思うが・・・。
- ・いずれにせよ、昔の古い鶏舎で確認されず最新のウインドレス鶏舎で確認された。さあ、何故ですか？というところです。
- ・農場面積40ha・130万羽規模養鶏場で全羽数殺処分が行われた。経営を維持する上で資金の確保が大きな課題となっています。ここで問題なのは、殺処分にかかわる国の補てん金が9カ月過ぎた現在も支給されていない。この申請手続きは地域の家畜保健衛生所が窓口業務として対応している。養鶏場と家保職員との間での書類のやり取りに相当の時間を要しているのが現況のようです。
- ・大規模農場での殺処分に関わる案件は地域経済や雇用に影響するだけに、農場と行政がタッグを組み迅速な対応が求められている。
- ・配合飼料価格高騰対策について、福島県畜産関係者が共同で県知事に令和6年度予算要

望したということですが、このような情報がいま必要なのではないのでしょうか。

・肉用牛経営の伊東さんや酪農経営の成田さんがお話しされていた輸入乾草についても価格が高騰しており、これの対策も必要だと認識しています。青森県の事例では大規模になればなるほど輸入乾草に頼る農場が多いです。

・大家畜の敷料についても、バイオマス発電の普及に伴い「おが粉」の入手が困難になってきています。加えて輸入敷料（木製ペレット）も入手が難しいとの情報もある。

青森県の畜産経営者が水稲経営者と連携して、粃殻をペレット化して敷料仕向けの製品を作っている事例がありますので、興味がある方がおられれば紹介いたします。

・制度資金と補助事業の関係について、伊東さんと成田さんがお話しされています。クラスター事業については時間と手間がかかる。最近では、少しスピードが出てきているとお聞きしていますが、交付決定まで6カ月位はかかると聞いています。

青森県の場合は基金協会内に「クラスター協議会」を設けています。複数年度で計画的に機械等を導入する場合はクラスター事業を、直ぐに機械を導入したいときは「環境整備機構のリース事業」を又は「日本政策金融公庫資金」を利用するようすすめています。いずれにせよ、これらについてはそれぞれの経営に即した対応をするよう指導しています。

・地域社会との共生について。山本さん鈴木さん三品さんが発言していました。地域の方々無くして畜産経営はなりたちません。まさにそのとおりです。

例えば、山本さんの農場で鳥インフルエンザが確認されたとき、130万羽の殺処分鶏を埋葬する場所の確保・運搬・埋葬などを短期間で処理できたのは、常日頃から地域関係者との付き合いなどによるものです。いずれも手弁当で応援してくれたそうです。

・今日は、5人畜産経営者から素晴らしい話しを聞かせていただきました。ありがとうございました。

・最後に、畜産経営の危機克服のためには、現況を踏まえた上で、とにかく前に前に進まないといけない。

以上



(発表者、事業推進委員、事務局)



(ワークショップ会場)

令和5年9月12日
全日畜ワークショッブ(福島会場)

鳥インフルエンザ予防のための農場分割管理導入で リスク分散による危機克服

有限会社東北ファーム
専務取締役 山本高久



1. 経営の概要(1)

- 1 経営の概況
- 所在地:青森県三沢市大字三沢字庭構54-44
- 経営形態:法人組織による採卵鶏飼養及び鶏卵の卸し・販売
- 経営従事者:従業員160名(うち外国人技能実習生20名)
- 飼養頭羽数:150万羽
- 年間生産量:鶏卵2,200t/月 鶏ふんたい肥45,000t/年

1. 経営の概要(2)

経営の沿革

- ・昭和41年 台名会社 東北ファーム 創業1万羽養鶏
- ・昭和61年 谷地頭農場へ移転20万羽養鶏へ
- ・昭和61年 有限会社 東北ファームに社名変更
- ・平成11年 HACCP対応GPセンター新築
- ・平成16年 資源リサイクル畜産環境整備事業堆肥処理施設建設
- ・平成22年 第二GPセンター新築38,000卵/時(HACCP対応)自動洗浄型衛生対応選別機導入 78万羽養鶏へ
- ・平成24年 第三GPセンター新築(HACCP対応)
- ・平成26年 成鶏舎設備更新110万羽養鶏へ
- ・平成28年 第四GPセンター新築(HACCP対応)
- ・令和2年 JGAP認証取得
- ・令和4年 鳥インフルエンザの発生 139万羽殺処分

発表のポイント

1. 経営の概要
1-1 経営の概況
1-2 経営の沿革と特徴
2. 畜産経営における危機と経営への影響
3. 危機克服への対応状況
4. 国や県の施策への要望
5. 持続的な畜産物生産(SDGs)の意識・経営危機から学んだこと

1. 経営の概要 (3)
鶏卵生産農場



ウインドレス鶏舎



鶏舎内部



農場入り口の消毒施設

1. 経営の概要 (4)
鶏卵生産農場



1. 経営の概要 (4)
養鶏事業・製造部門



第4GPセンター(2016年4月新設)



均質な製品供給のため製品検査を実施



GPセンター内部

1. 経営の概要 (5)
養鶏事業・鶏卵販売



健康な鶏から産まれた「味乙女」



煌めくたまご



業務用味乙女(あじおとめ)

1. 経営の概要(6) 養鶏事業・鶏卵販売



2. 畜産経営における危機と経営への影響

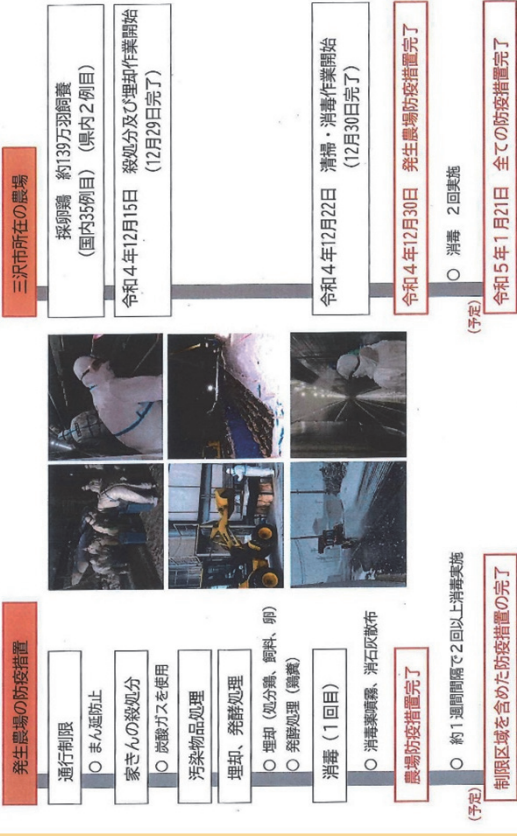
配合飼料価格や電気料金・資材等の高騰

・鶏卵生産に必要な配合飼料等の生産コスト上昇を生産卵の販売価格に転嫁できない。

(2) 高病原性鳥インフルエンザに感染

- ・鳥インフルエンザ等の疾病発生を未然に防ぐ衛生等の対策にはJGAPやHACCP等の励行を通して万全を期していたが、2022年12月高病原性鳥インフルエンザが確認され、飼育全羽数の139万羽を殺処分。(感染した原因は不明)
- ・全鶏舎48棟のうち感染が確認されたのは、ウインドレス鶏舎の最後尾1棟(4万羽)のみであった。
- ・殺処分は行政機関・自衛隊等の支援により短期間で終了することが出来た。埋葬地については自己所有地のほか市有地の使用が認められた。
- ・殺処分により、鶏卵の販売による収入が無く、農場運転資金の確保が重要な課題。
- ・損失額は70億円に及んだ。

高病原性鳥インフルエンザの防疫対応



3. 危機克服への対応状況(1)

1. 配合飼料価格高騰等生産コストの上昇については
「配合飼料価格安定制度」
「青森県配合飼料価格高騰緊急対策」

でかろうじて経営を維持継続。

2. 鳥インフルエンザについては

- ・殺処分を農場全体ではなく、最小限で行う「分割管理」を導入すべく地域家畜保健衛生所と検討中です。
 - ・この分割管理は「飼養衛生管理基準」に準拠し実施するもので、国は現在「農場分割管理基準マニュアル」を制定中とお聞きしています。
- 弊社も国の制定と同時進行で「社内マニュアル」を策定中です。

3. 危機克服への対応状況(2)

- ・ 具体的には現在の鶏舎48棟を区域単位に分け各々独立した個別の農場として管理するものであり、区域間の防護柵等の設置や区域内での生産卵出荷に必要な機械の導入等に要する費用が多額となる。
- ・ 当面は、鳥インフルエンザの流行に入る10月を目前に区域を広く設定し早期に鶏卵の生産を再開させたい。
- ・ 具体的には、12月末迄には90万羽を導入する計画。

5. 経営危機から学んだこと

1. 配合飼料価格安定制度や発生農家に対する支援助成金など畜産に係る補償制度の必要性。
2. 鳥インフルエンザ予防対策として、感染に備えて鶏舎ごとに鶏や卵の他、飼育員や車両の動線が重ならないようにする「分割管理」の導入の必要性を改めて感じた。
3. 殺処分に伴う埋葬地の確保。
4. 疾病対策の強化として、JGAPやHACCPを再検討して内容の充実と励行。
5. GPセンターは農場の外に設置が重要。

4. 国や県の施策への要望

1. 鳥インフルエンザによる殺処分を最小限にする「分割管理」への投資に対する助成。
2. 感染源とされる渡り鳥などの野生動物の侵入防止柵の整備、車両の消毒場所の設置などのための助成。
3. 鶏の処分は生産者の経済的な打撃が大きく、消費者への鶏卵供給にも大きな支障をきたすので、鳥インフルエンザの発生した鶏舎とその周辺に限定すること。
4. 鳥インフルエンザ発生農家に対する支援助成金の早期支払い。
5. 鳥インフルエンザ発生農家に対する経営再建のための融資制度の充実。

5. 持続的な畜産物生産(SDGs)の意識

1. 鶏ふんは、耕種農家の水田に還元し、飼料用米を利用しての耕畜連携、及びリンゴジュース残渣給与による銘柄卵の生産等。
2. 鶏ふん発酵施設等環境衛生施設の設置により環境負荷低減と鶏ふんの広域流通による肥料としての有効利用促進。
3. 認証を取得しているHACCP・JGAPのアピールで消費者ニーズ(衛生管理面、要望の多様化)に対応し、食の安全・安心に心がけて高品質なクオリティの高い卵生産。

全日養ワークショップ（開催会場）
[2023年（令和5年）9月12日]

ET和牛肥育一貫経営への転換で徹底した個体管理分析 による経営改善で危機克服



株式会社伊東牧場
代表取締役 伊藤輝美

1 (株) 伊東牧場の概要 (その1)

- 所在地 宮城県登米市中田町石森字桑代17
- 経営形態 法人組織による和牛肥育一貫経営
- 経営の特徴
 - ETIによる黒毛和種スモールを市場から導入し、育成・肥育して出荷
 - 農場は3か所に整備。2010年にスーパール資金を活用して800頭規模の肥育農場を有賀地区に建設
 - 2020年に父親から経営を継承して経営の法人組織化を契機に、F1肥育主体の肥育経営から、酪農家が生産したETI和牛飼養主体の肥育経営に転換
 - HACCP認証を取得して牛の飼養衛生管理を徹底し、経営改善に取り組んでいる
 - 畜産クラスター事業を活用して哺乳ロボット、ローラーペーラーを導入。



肥育系牛を導入して育成・肥育



哺乳ロボットの導入

発表のポイント

1. 伊東牧場の概要
2. 畜産経営危機
 - 2-1 畜産経営危機の要因
 - 2-2 畜産経営危機の経営への影響
 - 2-3 畜産経営危機克服への対応
 - 2-4 経営危機から学んだこと
3. 持続的な畜産物生産への意識
4. 国、県等の施策への要望

1 (株) 伊東牧場の概要 (その2)

- 経営従事者12名雇用8名、家族4名
- 飼養頭数
 - 黒毛和牛 1,600頭
- 肥育牛出荷約 800~900頭/年
- 飼料生産基盤
 - 自給飼料生産
 - 水田稲WCS45ha
 - 水田稲わら5営農組合から購入
 - 水田飼料用トウモロコシ（委託）12ha



ロールした稲わらの収穫・運搬



牛舎からのふん尿搬出

2 畜産危機

2-1 畜産危機の種類

- ・近年の飼料価格高騰により2020年に比べ、月1,000万円の負担増
- ・和牛スモールを肥育素牛として導入するための購入費用負担が増加
- ・父親からの経営継承時における借入金返済の負担



和牛スモールを肥育素牛として導入

2-3 畜産経営危機への対応状況

- 配合飼料価格安定補償制度の活用
- F1肥育経営から肉用牛肥育経営安定交付金（牛マルキン）が発動しやすい和牛一貫経営に転換したことにより、経営の安定化を図った。
- 肉用牛肥育経営安定交付金（牛マルキン）の活用

2-2 畜産危機の経営の影響

- 今回の購入飼料高、資材高に加えて、父親から経営を継承した際には借金も引き継いでおり、和牛一貫肥育への転換途上の為資金運転の資金繰りに苦労している
- 金融機関からの借り入れ時に詳細な経営内容の提示を求められる。
- 融資基準が厳しくなってきたり、経営の現状分析が大切。

2-4 経営危機から学んだこと

- 資金、人、設備にゆとりを持つこと。人もゆとりのあるところには来ない。
- 肥育管理のプログラムをシンプルにして、ワクチン接種も定期的に行う。
- 肥育牛は800頭を概ね一人で管理。イレギュラーな事態が発生しないように牛を常に見回り観察して適切な飼養管理を実施するとともに導入牛の血液検査を実施して分析することにより能力を把握して経営改善を図っている。
- 畜産に関する価格補償制度・支援助成制度の必要性。

2-5 持続的な畜産物生産 (SDGs) の在り方に対する意識について

- ◎ SDGs は農業生産を行っていくうえでは重要なことであり、このことを外れた生産方式は地域農業でトラブルを発生させることとなる。
- ◎ HACCP 認証を取得して牛の飼養衛生管理を徹底することにより経営の改善を図っている。

4. 国、県等の施策への要望

- 畜産農家が安心して安定した経営ができるように、購入飼料価格補償制度の充実。
- 肉用牛肥育経営安定交付金（牛マルキン）制度の充実。
- 施設・機械等に対する補助及び融資制度の充実。



採卵鶏経営における危機克服と持続可能な発展を
求めて

令和5年9月12日
三品 重利



株式会社アグリテクノ


1. 経営の概要(その1)



発表のポイント

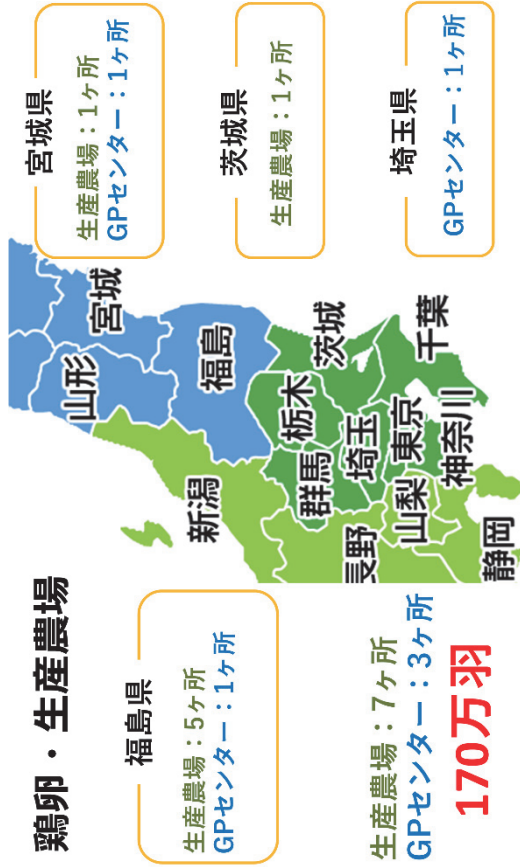
1. 経営の概要
2. 近年の畜産経営危機と対処
3. 持続可能な開発目標(SDGs)の取り組み

1. 経営の概要(その2)

- 1 経営の概況  株式会社アグリテクノノ
 - 所在地: 福島県伊達市坂ノ下14-3番地
 - 経営形態: 鶏卵の製造・販売
肥料の製造・販売
 - 経営従事者: 223名
 - 飼養頭羽数: 約170万羽
 - 年間生産量: 鶏卵 30,000t

1. 経営の概要(その3)

鶏卵・生産農場



1. 経営の概要(その4)

鶏卵・販売エリア

東北地区への販売

30%

首都圏への販売

70%



1. 経営の概要(その5) 養鶏事業(生産→製造→販売)

●一貫生産方式

雛から自社農場で育てる一貫生産



2. 近年の畜産経営危機と対処(その1)

1. 経営危機 高病原性鳥インフルエンザの発生

- ・昨シーズンは26都道府県で84例が発生
 - ・国内総飼養羽数の5.5%に当たる**1,771万羽が殺処分**
 - ・防疫レベルが高いとされる**大手生産者の発生多数**
- 鶏卵の供給が不足し、市場はパニックに
供給量が不足し、欠品や外食メニューからカット
発生農場の生産が復活しても、
需要が低下し、相場が下がる

- 当社では、、、
- ・2022年12月に育成鶏舎で高病原性鳥インフル発生
 - ・育成鶏が感染し、約10万羽が殺処分
 - ・約4カ月間、清浄化のため、鶏舎飼養禁止

2. 近年の畜産経営危機と対処(その2)

2. 畜産経営危機への対処 高病原性鳥インフルエンザ対策

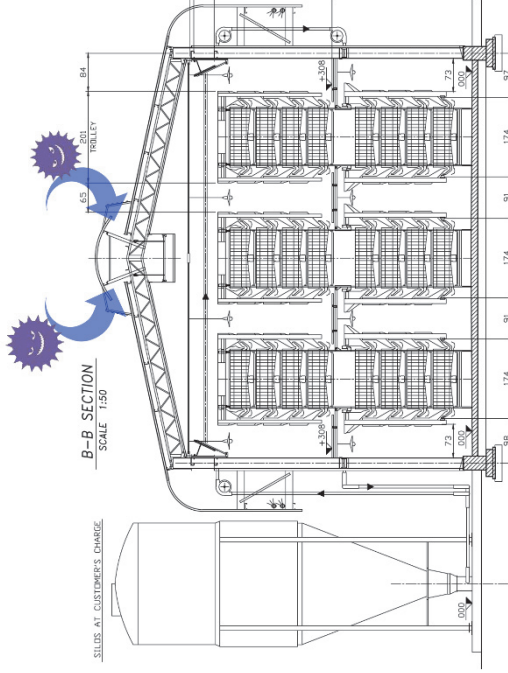
今まではネズミや野生動物、人が鶏舎内に持ち込むケースが多かった。
昨シーズンの発生は空気感染ではないかと思われる事例が多い(発生農場からの聞き取り)
今までの防疫管理では対策は不完全。



対策①: ウインドウレス鶏舎の妻側にフィルターの取り付け
対策②: 鶏糞処理の分別管理

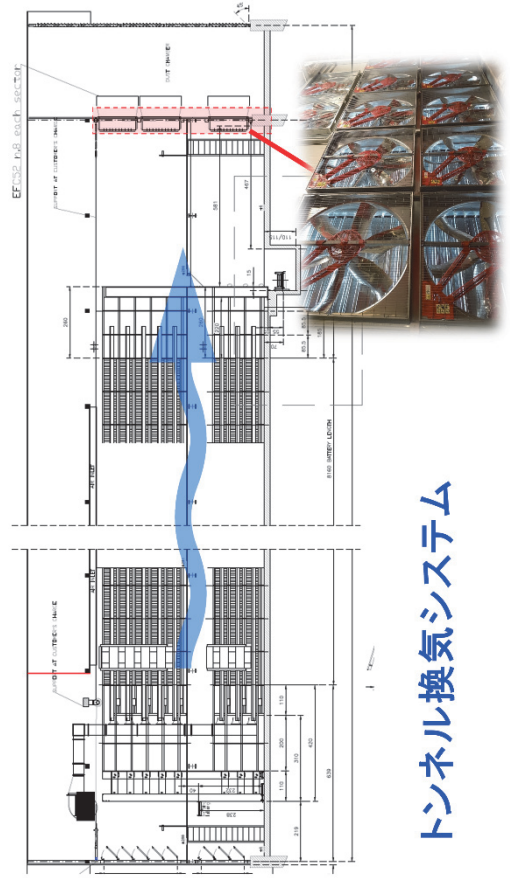
2. 近年の畜産経営危機と対処(対策1-2)

● 冬季の鶏舎換気システムについて



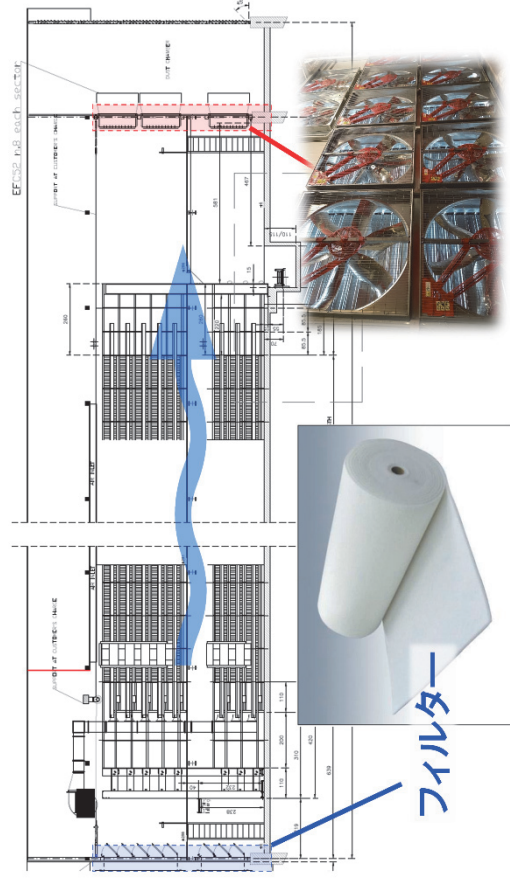
2. 近年の畜産経営危機と対処(対策1-1)

● 鶏舎換気システムについて



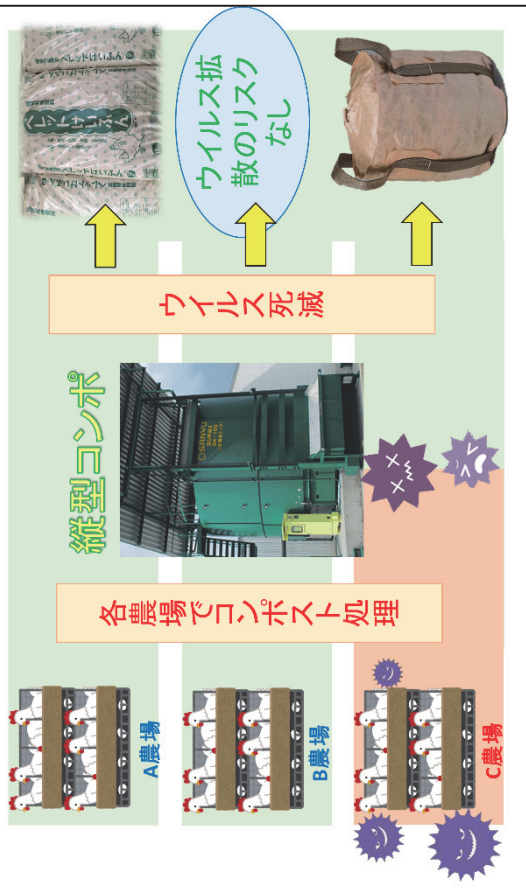
2. 近年の畜産経営危機と対処(対策1-3)

● ウインドウレス鶏舎の妻側にフィルターの取り付け



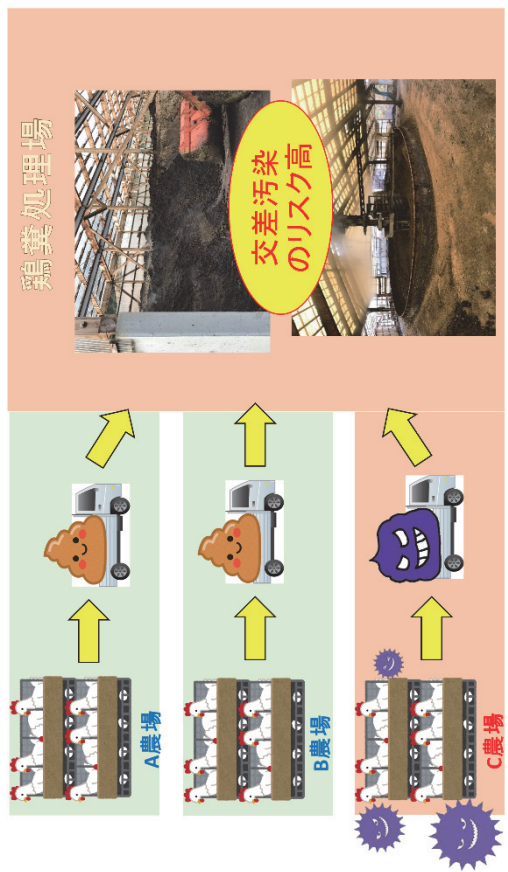
2. 近年の畜産経営危機と対処(対策2-2)

● 鶏糞発酵処理の分別管理



2. 近年の畜産経営危機と対処(対策2-1)

● 今までの鶏糞発酵処理



フィルター設置写真

3. 持続可能な開発目標(SDGs)の取り組み(その1-1)

アニマルウェルフェアの取り組み

1. 2017年に茨城県の桜川農場に多段式平飼い鶏舎建設
2. 鶏舎は、自然の光と風が入る、セミインドレレス鶏舎を採用。鶏舎内温度が高い場合や空気を入れ替える際は、ファンで人工的に風を生み出すことができ、鶏にストレスがかららない、より良い快適な環境を目指している。
3. この鶏舎は、EUの厳しいウェルフェア基準を満たしつつ、アニマルウェルフェアと衛生環境を両立させるシステムで、鶏にも快適な空間を創造

3. 持続可能な開発目標 (SDGs) の取り組み (その1-2)



ケージ飼育



ケージフリー

3. 持続可能な開発目標 (SDGs) の取り組み (その1-4)

● 「平飼いたまご」 成鶏舎



- ・ 100日齢で成鶏舎へ移動
- ・ 成鶏舎はカーテンを開け閉めできる構造で、自然光が入る
- ・ 夏場の強制換気が可能なファン付き
- ・ 設備の下に除ふんコンベアがついている
- ・ 飼育面積、止まり木、給水・給餌スペースなどはE基準がベース
- ・ 飼育スペースはケージ飼いの約2.5倍

3. 持続可能な開発目標 (SDGs) の取り組み (その1-3)

● 「平飼いたまご」 育成トレーニング



- ・ 40日齢で専用育成舎へ鶏を移動
- ・ 卵を産む成鶏舎は多段式になっているため、育成設備でトレーニングが必要
- ・ 専用の多段式育成設備で羽ばたいたり、飛び動作を覚えさせる

3. 持続可能な開発目標 (SDGs) の取り組み (その1-5)

● 「平飼いたまご」 販売



- ・ 小売売価：350円前後
- ・ 月間100,000パック販売

12 つくる責任
つかう責任



15 陸の豊かさも
守ろう



- ・ 飼料の主原料であるとうもろこしは遺伝子組換えの混入を防ぐため、分別生産流通管理を行っている
- ・ 脱プラのため、古紙をリサイクルしたモウルドパックを使用
卵の殻もモウルドに使用

3. 持続可能な開発目標 (SDGs) の取り組み (その2-1)

● コープ東北サンネット共同開発商品

三陸の漁業を支援する共同プロジェクトから生れた商品

三陸沿岸のワカメが食用で使えきれない状況から、
鶏に与える飼料にワカメ加えた卵を開発



ご清聴ありがとうございました！

畜産業の
川上から

私たちは、はじめに、「たのしく
当たり前の「おいしさ」を創造し、
人々の暮らしに貢献すること、
お客様に愛される企業を目指します。

3. 持続可能な開発目標 (SDGs) の取り組み (その2-2)

● コープ東北サンネット共同開発商品

…… 飼料に配合される三陸産ワカメについて ……





全日畜ワークショップ（福島会場）
[2023年（令和5年）9月12日]

「石川はちみつ牛」のブランド化で畜産経営危機克服

有限会社 鈴木畜産
鈴木 佳子

(有) 鈴木畜産の概要 (その1)



はちみつの補給

「自然の素材で印刷作用、疲労回復やストレス軽減に効果がある」と、黒毛和牛にはちみつを与えている。



鈴木畜産Office x Shop

- 所在地 福島県石川郡石川町 坂路字馬場宿78
- 経営形態 法人組織による肉用牛肥育及び牛肉商品の販売
- 牧場開設・6次化経営の経緯**
- 1代目の祖父が牛をセリに出すための仲介業を行い、2代目の父が牛の飼育を始め、平成10年の法人化と共に『石川はちみつ牛』を商標登録した。
- 平成29年に先代から事業承継。
- 『石川はちみつ牛』のブランドینگと加工品の販売を始めた。
- 令和4年9月に“鈴木畜産Office x Shop”がオープンした。

発表のポイント

- 1 鈴木畜産の概要
- 2 畜産経営危機
 - 2-1 畜産経営危機の種類
 - 2-2 畜産経営危機の経営への影響
 - 2-3 畜産経営危機への対応状況
 - 2-4 畜産経営危機から学んだこと
- 3 国、県等の施策への要望



(有) 鈴木畜産の概要 (その2)

肉用牛生産部門の概要

- 飼養頭数 黒毛和種肥育牛 600頭
- 肥育牛出荷 240~250頭/年
- 労働力 自家労働2人（1人販売部門）
雇用4人（週休2日、労働時間8-17時）
- 飼料生産基盤（自給飼料生産は行っていない）
<購入>
- 稲わらは中国からの輸入、一部石巻から導入
WCS 250kg/ロール×1,000ロール
- 堆肥を活かした循環型農業を行っており、堆肥を耕種農家に供給。（10t/タンク×20台を会津方面へ）
- 敷料用もみ殻を水田農家から入手。



肥育牛舎



ストレスのない環境での肥育

食肉加工販売部門の概要（その1）

- 平成29年から『石川はちみつ牛』のブランディングと加工品の販売を始めた。
- 「持続化補助金」、「福島県6次化ステップアップ補助金」等を活用して、畜産加工販売店舗など整備した。
- ブランド化に向けた第一歩としてデザインの重要性に着目し、ロゴマーク・パッケージ・カタログ・ホームページ等のデザインをプロのデザイナーに依頼した。
- ロゴマークは、漢字の「牛」とカタカナの「ハチ」のどちらにも読み解けるシンブルでスタイリッシュなものになった。
- 発明協会を通じ、類似デザインがないか著作権の確認も行った。



弊社のロゴマークが、地元私立高等学校サッカー部、サッカーリーグ年間のユニフォームに印刷されている。

食肉加工販売の概要（その3）

- 6次化の販路拡大など煩雑な作業助けてくれたのが商工会。市場調査と称して、担当者と有名飲食店に幾度となく足を運んだ。
- 都市圏でどう評価されるか知りたいたいと、商談会『地方銀行フードセレクション』にエントリーした。ふたを開けてみると、都内デパートや高級スーパーから取引依頼が相次いだ。あるバイヤーからは「桐箱に入れたいたいワオリティ」と太鼓判を押された。
- 現在、石川はちみつ牛及び加工品はSHOP、WEB SHOPで購入可能。また、石川町のふるさと納税返礼品にもエントリーしている。
- 加工品については「鈴木畜産Office×Shop」脇に設置した冷凍自動販売機で24時間いつでも購入可能。
- 贈答用のギフトボックスを用意しているため、ギフトシーズンは注文が増加する。



自動販売機は24時間購入可能



サイズに合わせたギフトBOX



食肉加工販売部門の概要（その2）

- 主軸となる加工品は、「塩で食べる黒毛和牛ハンバーグ」
- 「山葵で食べる黒毛和牛ローストビーフ」
- 「ちよっと贅沢なコロシケ」
- 価格設定は、商工会から製造原価の食品加工に精通した中小企業診断士を紹介していただきアドバイスを受けた。
- このような新規事業に対し、石川町や商工会は積極的にイベント等でPRする機会を作り応援してくれた。



塩で食べる黒毛和牛ハンバーグ (4人〜5人前) / 石川はちみつ牛



山葵で食べる黒毛和牛ローストビーフ (4人〜5人前) / 石川はちみつ牛



ちよっと贅沢なコロシケ (4人〜5人前) / 石川はちみつ牛

2 畜産経営危機

2-1 畜産経営危機の種類

- 自然災害
 - ・12年前の東日本大震災後は食肉販売の運営を休止せざるを得なかった。
 - ・石巻産福わらを利用していたためセシウム含量の多い堆肥が5年ほど処理できず、野積みとなり畜産環境問題発生
- 社会的要因
 - ・近年の飼料・肥料や燃料等の高騰及び電気代等のアップによる生産費の増



2-2 畜産経営危機の経営への影響

- 東日本大震災後の風評被害等による販売の減及び堆肥処理不能
- 飼料費、燃料、光熱費の高騰による生産費の増
- コロナ禍によるインバウンド需要の減による売り上げ減少

2-4 畜産経営危機から学んだこと

- 石巻産稲わらを利用していたためセシウム含量の多い堆肥が5年ほど処理できず、野積みとなり畜産環境問題発生。
周辺住民から苦情が出て、地域住民との交流の必要性を感じ、環境対策の重要性を認識。
- 地域経済の活性化のため、石川町、商工会、教育委員会など関係機関が町を挙げて取り組んでくれ、販路拡大と経営の安定化につながっている。
経営危機は、地域行政や住民などとの支援・連携を通じて乗り越えることを学んだ。
- 6次化に取り組みにあたり、ブランド化に向けロゴマークやホームページのデザインをプロに依頼し、自信をもって進めたことは成功の要因と考えている。

2-3 畜産経営危機への対応状況

- 牛肉は相対取引で販売。肥育素牛導入は福島、岩手、北海道に足運び一定の導入価格で仕入。
- 首都圏を中心に相対取引を行い、問屋に直接納品。
- 飼料などの価格高騰に対し、配合飼料価格安定制度による支援を受け、運転資金は借り入れで対応。
- 『石川はちみつ牛』のブランドイングにより食肉加工品の付加価値を高めて販売。
- 「持続化補助金」「福島県次化ステップアップ補助金」等を活用して、販売店舗などを整備。
- 地元小中学校の「テーマルマナー教室」に「石川はちみつ牛」を提供し、次世代を担う子供たちに良質で美味しい牛肉を知ってもらおう活動を継続。
- 広くPRするため、地域におけるWeb配信イベント「ふるさと食体験!!」に参加し、おすすめのレストランを紹介した。



3. 国、県等の施策への期待

- 運転資金の低利融資制度を継続実施
- 畜産農家が安心して安定した経営ができるように、購入飼料価格補償制度の充実

ご清聴ありがとうございました



「石川はちみつ牛乳産地推進部」を訪問したワークショップを実施
(R5.5.27)

全日畜ワークショップ(福島会場)

磐梯山麓の高台にある「成田牧場」からの事例紹介

自給飼料率の向上とスマート技術の導入による危機克服



令和5年9月12日

成田牧場 成田 昌弘

紹介内容

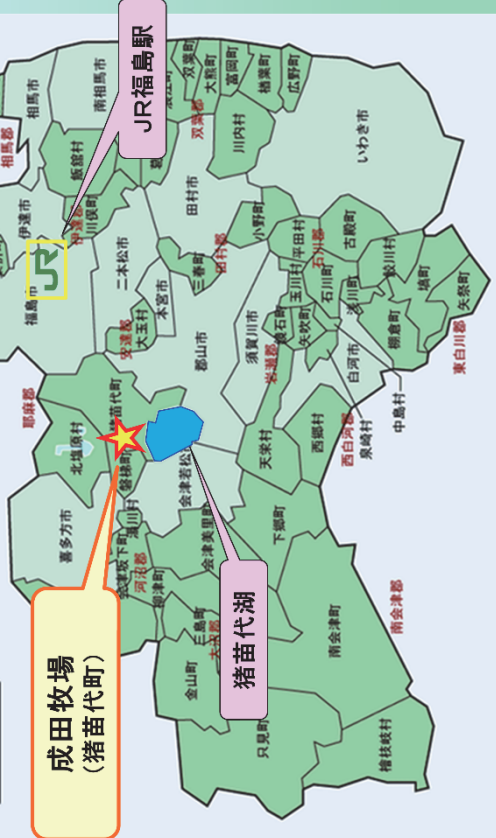
- ・ 成田牧場の概要
- ・ 畜産経営危機の取り組み
- ・ 持続的な畜産物生産(SDGs)の在り方に対する意識
- ・ 成田牧場の将来の夢



成田牧場の位置

福島県

成田牧場
(猪苗代町)



成田牧場のプロフィール

成田牧場は福島県の中央、磐梯山麓にあり、祖父が開拓で入植し、私で3代目
牧場の周辺は森林に囲まれており、冬は雪深く開拓は命がけだったと聞いている。

2011年の東日本大震災で、牧草は利用できなくなり、搾った牛乳を捨てる日が続いたが、家族の強いききずなで乗り切ってきた。
現在は、共進会にも力を注ぎ、魅力ある牛飼いでありたいと常に思っている。



二人三脚の家族経営

祖父が開拓で苦勞して入植した土地を守り、3代目の私は、祖父が築いてきた経営を引き継ぎ、父とともに二人三脚でさらなる飛躍を目指している。



成田牧場の経営概要

労働力	3人(本人、父、妻)、技能実習生1人
乳牛飼養頭数	経産牛 115頭 未経産牛 55頭
生乳生産量	概ね880t/年(目標1,000t) 経産牛1頭の平均乳量9,600kg/年
自給飼料	牧草地 20ha 共同草地 65ha 稲ホールクroppサイレージ 15ha 粗飼料自給率 90%を実現
経営の変遷	・昌弘氏(本人)は県農業大学卒業後、千葉の長嶋牧場で実習、平成10年に就農 ・受精卵移植技術を習得し、黒毛和牛の受精卵移植を実践 ・令和2年木造フリーバーン牛舎を公庫融資資金で新築、6頭複列ヘリングボンパーラー、カウスカウトソフト導入による牛群管理

2-2 畜産経営危機の経営への影響

1. 震災の影響

- ・震災の影響で、成田牧場でも周辺地域の牧草を使えない状況になった。それまでは、自前の広大な草地で牧草を作り、牛たちに与えていたが、震災を境に2013年の春頃までは100%購入飼料に頼らざるを得なくなった。コストの増大、えさの栄養バランスが難しくなった。
- ・「草地の除染も終えて、育成牛に自家製の牧草を与えることができるようになった。栄養バランスも改善した。震災前は1頭当たり30kgの生乳を搾っていたのが、震災直後はえさが変わったこともあり、搾乳量が落ちてしまっていたが、今では震災前の水準以上に回復している。

2. 飼料・肥料や燃料など生産資機材の高騰による生産費の増

- ・濃厚飼料の購入代は、危機前の1.5倍に増加

3. 労働力不足

- ・父親の高齢化、妻の育児労働時間配分増など家族経営(3人)の労働力不足、酪農ヘルパー利用費高騰が課題

2 畜産経営危機の取り組み

2-1 畜産危機の種類

- 自然災害
 - ・12年前の東日本大震災による周辺地域の牧草を使えない状況になった。
- 社会的要因
 - ・近年の飼料・肥料や燃料など生産資機材の高騰及び電気代などのアップによる生産費の増
- 人的要因
 - ・労働力不足

2-3 畜産経営危機への対応状況(その1)

1. 自給飼料の確保による飼料高騰に対処

- ・牧草地20ha、共同草地65ha及び稲ホールクroppサイレージ15haを基盤とした自給飼料確保により、輸入飼料の高騰に耐えられる経営を実現
- ・粗飼料自給率は90%以上を実現、10%を北海道から購入
- ・自給飼料の品質アップのため、牧草地の更新により牧草の栄養価を高める取り組みを進めている。



ベールサイレージ



2-3 畜産経営危機への対応状況（その2）

2. 生産資機材の高騰への対処

- ・畜舎、ミルクイングパーラー、家畜管理機器などの新規設備投資は、イニシャルコスト、償却費及び維持管理費の節減のため、畜舎構造、導入機種の徹底したコスト比較により整備、導入



低コストで建設の新築木造牛舎



フリーパーン牛舎内部

2-3 畜産経営危機への対応状況（その3）

3. 労働力不足への対処

- ・スマート技術の導入による労働力不足を補う
- ・飼料調製、飼料給与、ふん尿処理、搾乳などの機械化
- ・担い手確保策として、後継者育成のため実習生の受け入れ
- ・畜舎にトイレ、シャワーなど設置による環境整備



新規導入の給餌器



6頭複列ヘリングボーンパーラー

2-4 畜産経営危機から学んだこと

1. 設備投資及び労働力の節減

- (1) 政策金融公庫の融資によるフリーパーン木造牛舎建設。徹底したコスト削減で、投入は、鉄骨造の1/3の建設費。ヘリングボーンパーラーは国の助成事業を活用。搾乳ロボットは初期投資、償却費が嵩むので、ヘリングボーンパーラーを選択
- (2) 牛群はカウスカウト(スマート畜産技術)により、繁殖、生乳生産、疾病など個体管理を行い労働力節減



「カウスカウト」の概要（その1）

首につけたリスボンダーで活動を常時モニタリングする。リアルタイムでデータを無線で送り、データ変化を発情周期と照らし合わせて発情の兆候を監視できる。データの確認はタブレットやスマートフォンで行うことができ、アラームで通知も行う。繁殖成績を向上させることで飼養管理の最適化が実現



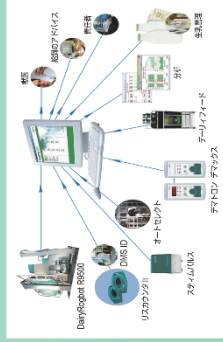
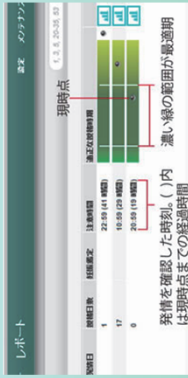
多様な端末で操作・確認
インターネットに接続することですべての活動データをコンピュータ、タブレット、スマートフォンで操作や閲覧、保存可能。メールですべての関係者に定期的かつタイムラグなく情報を送信するので、簡単に情報共有できる。



オリオン機械 酪農機器ホームページより引用

「カウスカウト」の概要(その2)

正確な授精適期を知らせるリスポンダーは昼夜を問わず活動量を計測し、データを送信する。リスポンダーからデータを受信した乳牛データを牛群管理データベースへ反映し、毎日の活動量をグラフ化、授精適期をカラーバーで簡単に確認できる。また、活動量が増加した牛を発見した場合、牧場内に設置したVPUプロセッシングユニット(メインコントローラー)の赤色LEDが点滅して知らせる。



飼養管理ソフトと連動
従来の飼養管理ソフト「デーリーブラ
ンC21」との連動が可能

イオリオン機械 酪農機器ホームページより引用

成田牧場の将来の夢

先代が拓いた牧場の思いを次世代に引き継いでいくために

徹底した設備投資
コスト削減、スマート技術を導入して、経営の効率化を図り、経営危機を乗り越え余裕のある酪農経営を目指す。



地域の農家と連携して、イネホールクローブなど自給飼料の生産を確保して、健康な乳牛を育てて魅力のある牛飼いでいきたい。

酪農家同士のネットワークを広げて乳牛の改良を進めて、おいしい牛乳を消費者に届けたい。

命の学びをテーマに酪農経営を通して、食と子供たちに命の大切さを伝えていきたい。

3. 持続的な畜産物生産(SDGs)の在り方に対する意識について

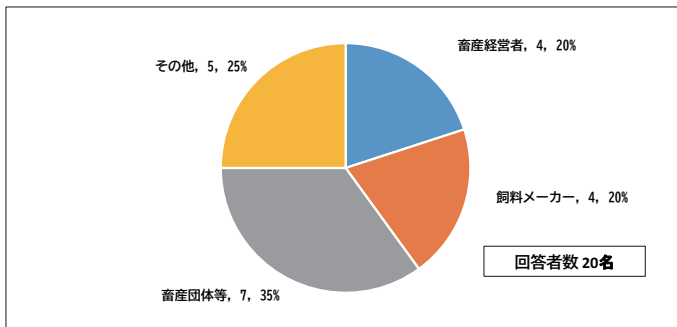
- ◎ 地域と共存した持続可能な畜産経営
 - ・牛群改良協議会など酪農家同士のネットワークを通じた家畜生産性向上、担い手確保など持続可能な畜産経営の実現
- ◎ 地域の耕種農家と連携し地域農業を活性化
 - ・地域耕種農家へのたい肥の還元
- ◎ 地域資源の活用による自給率の向上
 - ・水田への飼料用米やトウモロコシの導入による自給飼料確保
- ◎ 資源循環型畜産の構築(牛⇒土⇒作物(飼料作物)⇒牛)
 - ・牧草地、飼料作物生産地へのたい肥の還元による循環型資源利用を実現
- ◎ スマート畜産技術を活用した労働力の節減と生産性の確保
 - ・労働力の節減、生産性向上に結びつく低コストスマート技術の開発

ご静聴ありがとうございました

成田昌弘

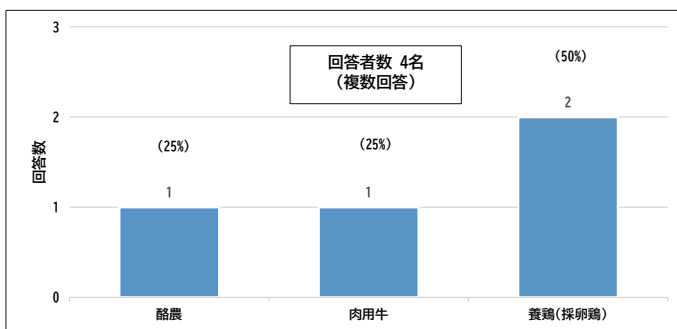
令和5年度 危機克服 第1回ワークショップ 福島会場 アンケート結果（回答者総数 20名）

問1 回答者の属性



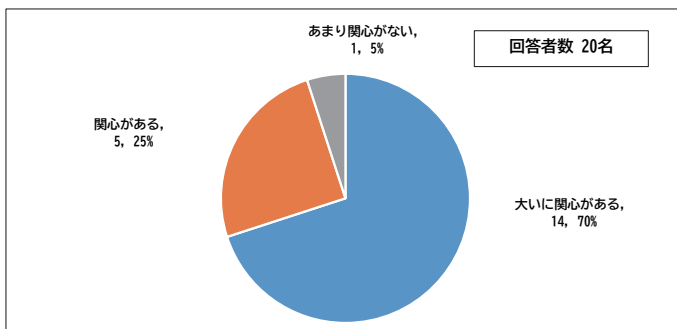
回答者の属性は、「畜産団体等」が 35%、「畜産経営者」及び「飼料メーカー」が 20%、「その他」が 25%であった。「その他」の内訳は、「飼料販売店(業)」(15%)、「金融機関」(5%)、及び「報道機関」(5%)であった。

問2 畜産経営の「畜種」



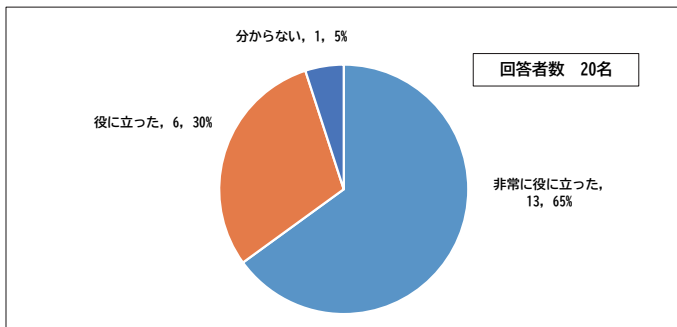
前問で、「畜産経営者」と回答した者の「畜種」については、「養鶏(採卵鶏)」が 50%と多く、次いで「酪農」及び「肉用牛」が 25%であった。

問3 「畜産経営の危機克服し、持続発展のヒントを求めて」の関心度合い



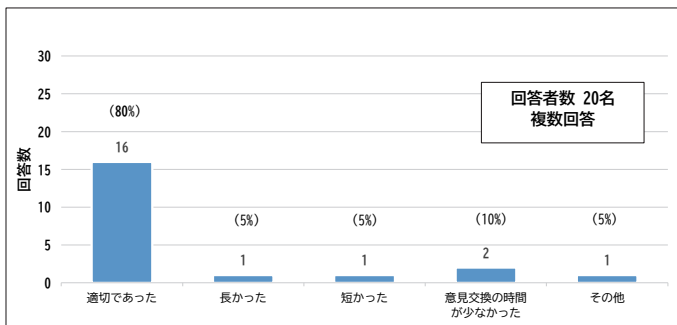
ワークショップのテーマである「畜産経営の危機克服し、持続発展のヒントを求めて」への関心度合いは、「大いに関心がある」が 70%、「関心がある」が 25%と、大多数の回答者の関心が高かった。他方、「あまり関心がない」とする回答者が 1名(5%)いた。

問4 本日のワークショップは役に立ったか



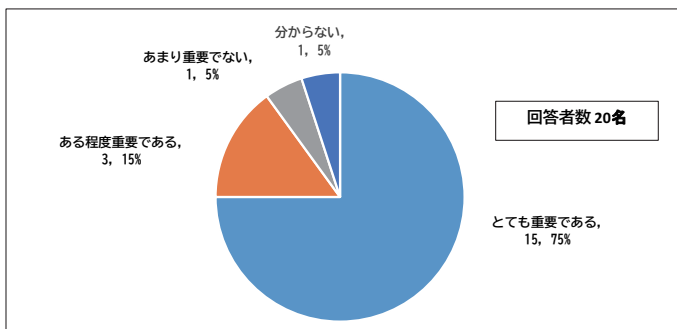
ワークショップが役に立ったかについては、「非常に役に立った」が65%、「役に立った」が30%と、大多数の回答者が肯定的な回答をしている。他方、「分からない」とする回答者が1名(5%)いた。

問5 時間配分について



時間配分については、「適切であった」が80%であった。そのほか、「長かった」、逆に「短かった」が各々5%、「意見交換の時間が少なかった」が10%であった。また、「その他」の回答が5%あり、「発表者を4名とし、発表者相互の意見交換を聞いたかった。主催者側のまとめが重複していたので、次回から工夫してはどうか。」という意見が寄せられた。

問6 「畜産経営の危機克服・持続のための実態緊急調査事業」は重要と考えるか



「畜産経営の危機克服・持続のための実態緊急調査事業」は重要と考えるかという問に対しては、「とても重要である」が75%、「ある程度重要である」が15%と、大多数の回答者が肯定的な回答をしている。他方、「あまり重要でない」、「分からない」とする回答が各々1名(5%)あった。

問7 (自由意見)

・伊東牧場社長より発表のあった、「他の業種から意見を取り入れてアドバイスを受け入れている。(同業種だと固定概念をあるため他業種の方がまた違った視点からの意見をもらえる。)」という考えは大変参考になった。その他、例えば女性の視点等もまた別の考え方をもらえる時もある。・鈴木畜産の報告の「6次化産業の成功は地域密着型にある。」も参考になった。

・経営主が自己経営を客観的に見つめ、それを説明できるスキルがある。さらに関係者、地域、行政との協調性を広く併せ持っているようであった。考え方、知恵等、情報を他からリアルタイムに得られる形を作っていることは強みであると感じた。高病原性鳥インフルエンザ (HPAI) の対応は今後も大変で、答えはない。

・様々な畜産への逆風は今後も予想されるが、その時々で対応できるよう「余裕をもった経営」が必要と感じた。余裕を持つためには、生産規模を抑えるのか、あるいは攻めて拡大するのか、適切な判断がこれまで以上に求められているように思う。

・人材育成、資金調達、試行錯誤を許容すること。

・経営者同士の意見交換、質問があると良いと思う。

・参加者の方が話していたが、もっと生産者の方に参加してもらえばよかったと思う。

・小さな畜産農家からの意見も大事かと思う。

・色々な優良生産者の体験談を聞いて、大いに参考になった。危機克服に地域との連携が重要であることを痛感した。

・想像以上に議論が活発に行われており、有意義であった。

・畜産経営者や関係機関の皆様から直接話を伺え、大変勉強になった。今後の畜産経営者向けの支援に活かしていきたいと思う。

「アンケート調査」にご協力をお願いします



このアンケートは、全日畜が取組んでおります「畜産経営の危機克服・持続のための実態緊急調査事業」のために活用させていただきます。本日の全日畜ワークショップ「畜産経営の危機克服し、持続発展のヒントを求めて（福島会場）」についてご感想等をお聞かせください。

問1 どちらからの参加ですか。以下のいずれかに「O」印を記入してください。

- (1) 畜産経営者 (2) 飼料メーカー (3) 畜産団体等 (4) 行政機関
 (5) 農業大学校等 (6) 施設機械メーカー
 (7) その他（具体的に：_____）

問2 問1で、(1)畜産経営者と回答した人にお聞きします。あなたの畜産経営の「畜種」は何ですか。以下のいずれかに「O」印を記入してください。（複数回答可）

1. 酪農
 2. 肉用牛
 3. 養豚
 4. 養鶏（採卵鶏）
 5. 養鶏（ブロイラー）
 6. その他（具体的に：_____）

問3 本日のテーマ「畜産経営の危機克服し、持続発展のヒントを求めて」の「関心度合い」についてお聞きます。

1. 大いに関心がある
 2. 関心がある
 3. あまり関心がない
 4. 全く関心がない
 5. その他（具体的に：_____）

問4 本日のワークショップは役に立ちましたか。

1. 非常に役に立った
 2. 役に立った
 3. あまり役に立たなかった
 4. 全く役に立たなかった
 5. 分からない
 6. その他（具体的に：_____）

裏面も記入をお願いします。

問5 ワークショップの時間配分等はいかがでしたか。（複数回答可）

1. 適切であった
 2. 長かった
 3. 短かった
 4. 意見交換の時間が少なかった
 5. その他（具体的に：_____）

問6 畜産経営の危機克服・持続のための実態緊急調査事業（目的：畜産危機を克服し、経営を継続されておられる事例の中から経営継続のためのヒントを得るために、危機を克服している事例集を作成する）は、これからの畜産経営において重要とお考えですか。

1. とても重要である
 2. ある程度重要である
 3. あまり重要ではない
 4. 全く重要ではない
 5. 分からない

問7 本日のワークショップのテーマ「畜産経営の危機克服し、持続発展のヒントを求めて」について、ご意見を自由にお書きください。

（自由意見欄）

ご協力、ありがとうございました。

9月12日畜産経営危機克服と持続発展ワークショップ

(一社)全日本畜産経営者協会は令和五年九月十二日、午後一時より福島県福島市・グランドパークホテルエクセル福島恵比寿において、ワークショップ「畜産経営の危機を克服し、持続発展のヒントを求めて」(福島会場)を開催する。

ワークショップが開催される趣旨は、近年のパンデミック等に飼料をはじめとした生産資材の価格高騰や入手困難により、畜産経営の存続が危機的な状況にあり廃業に追い込まれる経営体が多くなっていること。このため、今回の危機により受けた影響及び対応状況等を調査し、その中から経営継続のヒントを得るためとされた。

ワークショップは二部制により開催される。第一部は、畜産経営者等のゲストから、現在畜産経営を実施・継続されている今回の危機をはじめとした危機に当たって、どのように対応してきたのか、また、その対応における課題等についての報告が行われる。第二部では、会場参加者全員による、今回の畜産危機を乗り切るための対応策などについて意見交換を行い、畜産経営の危機を克服し、さらに継続発展するための取組みについてのヒントを追求するとされた。なお、第一部における報告者は別項の通りである。

全日畜ワークショップ畜産経営者五名の報告について

(一社)全日本畜産経営者協会は別項のように、ワークショップ「畜産経営の危機を克服し、持続発展のヒントを求めて」を開催する。

ワークショップの第一部において、五名の経営者より、今回の畜産危機をはじめとした危機に際して、どのように対応してきたのか、また、その対応における課題等について、報告が行われる。これについて、報告者は次の通りである。

- ①青森県三沢市の南東北ファーム山本高久専務取締役。東北ファームは、飼養規模一五〇万羽の採卵鶏経営である。
- ②宮城県登米市の榑伊東牧場伊東輝美代表取締役。伊東牧場は、肉用牛の哺育から肥育までの一貫経営である。
- ③福島県伊達市の榑アグリテクノ三品重利代表取締役社長。アグリテクノは、採卵鶏経営+農畜産物加工の多角化経営である。
- ④福島県石川郡の榑鈴木畜産鈴木佳子氏。鈴木畜産は、肉用牛の肥育及び牛肉商品の販売である。
- ⑤福島県猪苗代町の成田牧場成田昌弘氏。成田牧場は、家族経営による酪農経営である。

(9)

畜産

2023年(令和5年)9月13日(水曜日)

日本農

資材費高騰 家畜伝染病

畜産危機対策探る

東北の事例発表

全日本畜産経営者協会は12日、福島市で、資材高騰や家畜伝染病などの畜産経営危機への対応をテーマにワークショップを開いた。東北地方の5経営体に参加し、直面する課題や対応策を共有した。

宮城県登米市で年間800,000頭の肥育牛を出荷する伊東牧場は、飼料の高騰が大きな負担となっている現状を説明した。1カ月当たりの飼料代は2020年と比べて100万円増えた。

この課題に対し、同社は導入する全ての和牛を酪農家が受精卵で生産するスモールに絞ってコストを削減。肥育期間は一般的な30カ月齢から24カ月齢に短縮した。

福島県猪苗代町で経産牛115頭の酪農経営を行う成田牧場は自給飼料による飼料費低減の取り組みを発表した。同牧場では牧草地20畝、共同草地65畝などで自給飼料を生産し、粗飼料自給率は9割を超えている。牧草の栄養価向上、収量減に对应するため、定期的に草地更新を行っていることなどを説明した。

福島県石川町で黒毛和種肥育牛600頭を飼養する鈴木畜産は、はちみつを与えて育てる「石川はちみつ牛」のブランドینگと加工品の販売について報告した。同社はブランドینگに向けてロゴマークを作成し、カタログやホームページを刷新した。食肉加工販

売部門では、ローストビーフといった付加価値の高い商品を作り、県内外のイベントで販売機会を増やした。肉の販売先は首都圏を中心に、問屋に直接納入する形で利益を維持しているとした。

採卵鶏経営の青森県三沢市の東北ファームと福島県伊達市のアグリテクノは、鳥インフルエンザ対策として、鶏舎や鶏ふんの発酵処理を分割するなど発生リスクを低減する取り組みを紹介した。

ワークショップで共有した対応策

飼料・資材の高騰
伊東牧場(宮城県登米市・和牛肥育)
・子牛はEITで導入し良い血統を低価格で確保
・24カ月齢で早期出荷し餌代を低減
成田牧場(福島県猪苗代町・酪農)
・粗飼料を生産し、自給率は9割超え
・低コストで牛舎建築
風評被害・需要減
鈴木畜産(福島県石川町・和牛肥育)
・牛のブランド化へロゴマークなど作成
・加工品の販売強化
高病原性鳥インフルエンザ
東北ファーム(青森県三沢市・採卵鶏)
・分割管理に向けた施設の整備
アグリテクノ(福島県伊達市・採卵鶏)
・換気システムの改善
・鶏ふん発酵処理の分割管理

(取材を基に作成)

て同社提供

福島民友 2023年(令和5年)9月13日(水曜日)



畜産経営者直面の 危機と対応策報告

福島でワークショップ

全日本畜産経営者協会
(全日畜)は12日、福島市
で「危機克服」をテーマに
ワークショップを開いた。
飼料や資材の価格高騰など

を背景にした危機感を共有
し、解決策を話し合った。

畜産経営の危機の克服、
持続のための実態調査の一
環として、来年末まで全国5
カ所で開くワークショップ
の第1弾。東北地方の肉用
牛、養鶏、酪農の経営者5
人が、それぞれ直面した危

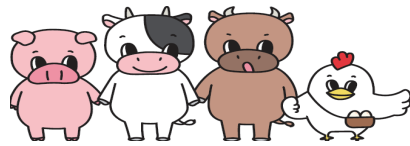
機と対応策を報告した。本
県からはアグリテック(伊
達市)社長の三田重利さん、
鈴木畜産(石川町)の鈴木
佳子さん、成田牧場(猪苗
代町)の成田昌弘さんが発
表した。

このうち三品さんは、昨
年の高病原性鳥インフルエ
ンザの発生を受けた対策と
して、ウイルスの侵入を防
ぐ鶏舎の換気システムや鶏
ふん発酵処理の分別管理
の取り組みを報告した。||
写真。

全日畜はワークショップ
を含む実態調査を踏まえて
事例集を作り、会員に配る。

福島民報 2023年(令和5年)9月22日(金曜日)

全日畜の畜産経営継続に関するワークショップが開催され、
青森、宮城、福島県から5名の畜産生産者が取組を発表した
旨の記事が掲載された



「全日畜」は畜種横断の畜産経営者の団体です



全日畜HP <http://www.alpa.or.jp>
全日畜HP <http://www.alpa.or.jp>
全日畜HP <http://www.alpa.or.jp>
全日畜HP <http://www.alpa.or.jp>